二　退却は混亂を生じ易し

退却は軍隊に敗戰の感を深からしめ、士氣を挫折し、兎もすれば風聲鶴唳に驚き混亂を生じ易い。故に指揮官は、よくその威望を以て軍隊を統率し、團結を鞏固ならしめ、一兵に至るまで沈着且つ剛膽に行動することが必要である。

特に夜間に於ては、指揮掌握は困難で、思はざるパニックを起し易く、時として友軍相擊つ慘狀を惹起することも、珍しくない。

昔より殿軍の將たるものは極めて勇敢、老練なる人物が任命せられてゐるのであつて、特に全軍のため犧牲となるの高邁なる精神が必要である。

第七章　戰　車

第一節　戰車の特質

航空と共に近代戰武力の骨幹をなすものに戰車がある。戰車の特質は、

1、偉大なる機動力を有すること。

良好なる道路上を時速三十—四十粁の速度を出すは容易である。而も無限軌道の發達により路外の不齊地も易々として通過出來る。

2、機關銃及び小口徑火砲を有し非常な攻擊力をもつてゐること。

機關銃二、火砲（三七粍—七五粍位のもの）一を裝備する戰車は通常であつて、現在は更に大きい火砲（七五粍—一〇〇粍級）を搭載する戰車も出來てゐる。隨つて戰車個個の攻擊力も相當なものであるが、大部隊となると想像も及ばない位の威力を發揮す

る。

3、裝甲を有し敵火に對する掩護力をもつてゐること。

小銃、機關銃の彈の貫通しない位の戰車は舊世紀の遺物である。三七粍―四七粍級の對戰車砲にも大丈夫なものに進歩し、更に目下これより大なる火砲にも抗堪し得るものになりつゝある。

卽ち近代戰戰力の必須の要素である攻擊力、機動力、防護力の三つを兼ね備へてゐるところに偉大なる特質が存するのであつて、確かに現代戰陸上武力の最新鋭たるを失はない。

隨つてその出現當時は、歩兵の補助兵器として用ひらるゝにすぎなかつたが、今日の機甲兵團に於ては歩兵と戰車はその地位を顚倒し、戰車が主體となり、歩兵は裝甲裝軌車等を利用して戰鬪に協力し、その成果を確保するやうに變化してゐる。

又各國に於てはかくの如き戰車を主體とする兵團がどし〳〵造られて、一般の地上の師團の數に非常な勢をもつて迫つてゐる。

戰車の弱點とするところは、地形の障碍（水流、濕地、斷崖等）の影響を受けることが大であること、目標が大きいこと、對戰車砲にやられ易いこと、自衞力の少いこと、視界の少いこと、指揮のしにくいこと等、いろ〳〵あるが、これは技術の進歩により改善せられるものが多く、又大量を集結することに依り、或は適當な補助兵種を編合することに依つて愈〻解消せられ、その强大なる威力が益〻倍加せられるものである。特に戰車だけではその强大なる威力に脆い所が出來るので、適當なる補助兵種、特に强力精鋭なる歩工兵部隊を、緊密なる結合下に置くことの必要性を强く銘記しなくてはならない。

これは戰車そのものの威力に、粘着性（最も端的に言へば土地の確保能力）がないからである。

第二節　戰車發達の歷史

一　戰車出現までの戰術の變遷

第一次歐洲大戰に於て最も問題となつた點は、實に機關銃の處理であつた。この機關銃が巧みに制壓又は破壞されない限りは、多くの場合攻擊は失敗に終つた。卽ち機關銃の發達こそ戰鬪を四年半に亙り持久化せしめた最大の素因の一つであつたのである。

火力裝備優秀なる敵が、一度地の利を占めて堅固に陣地を占領するや、最早攻者は如何ともなし難いものである。そこで必然的に大砲兵の出現を見た。

『砲兵は耕し歩兵は占領す』と言はれたやうに、敵の全陣地を原形を止めざるまでに擊ち擧げて、歩兵はこの濃密なる彈幕に膚接をして突擊すると言ふやり方である。このやり方にもいろ〳〵な變化があつたけれども、ともかく敵の陣地を占領すると言ふ目的は極めて困難であつて、非常な犧牲は拂つたけれども大體解決はしたのである。

併し又こゝに問題が起る。即ちこの大砲兵を自分の攻擊せんとする方面に持つて行くこと。これが陣地の原形を止めないまでに擊つ彈を準備すること。これは實に莫大な作業であつて、長時日を要し到底敵にこれをかくすことは出來ない（獨逸は英佛側よりもこの邊のやり方が非常に上手で、やり方そのものも相當變つてはゐるが）。だから敵はその正面の陣地を固くするため機關銃を分散させる。故に益〻彈が澤山必要となり、射擊する時間が愈〻長くなる。

一九一七年十月のマルメーゾンの攻擊の時の如きは、七日間連續で次の如く莫大な彈を擊つてゐる。

七五粍砲彈	二二、七〇〇瓲
重砲彈	四三、〇〇〇瓲
迫擊砲彈	一五、〇〇〇瓲

これは一例にすぎないが、當時のやり方は皆かうであつた。

だから敵はこの間に、敵の砲兵の擊たれない所に第二、第三線の陣地をつくる。

攻者は漸くのことで、第一線陣地はともかく取つたけれども、その時は敵の次の陣地が出來てゐて、これには手も足も出ない。攻擊するためには又大砲兵を前方に出さなくてはいけない。

併し陣地の原形をも止めないまでに擊つた陣地へ、自分の重い砲兵を持つて行くことは大變なことである。必然的に第二陣地に對しては攻擊頓坐となるのである。

そこで大體、自分の砲兵の射程の範圍を一つの限度として、攻擊を一つづつ區分して、準備をやりなほしては攻擊すると言ふ、所謂逐次攻擊の方法によらなければ、攻擊成功の見込みが少くなつて來た。

併しこんな方法で戰爭の決を求めるてふことは極めて大變である。

こゝで如何にして敵のアッと言ふ間に一擧に敵陣地を突破しようか（急襲一擧突破）と言ふ問題に、各國ともに心膽を碎いた。何とかして、

1、攻擊のための莫大なる準備を省略し、或は敵をだましてこれをかくし、又は敵の分らない遠い所で準備する等、ともかくも何處を攻擊するか、何時始めるかと言ふことを祕匿すること。

2、攻擊に方つては、砲兵の射擊と言ふやうな攻擊の前ぶれなしで、奇想天外の兵器と戰法をもつて敵の全く不意に乘じて攻擊すること（奇襲）。

3、攻擊を始めた後は、敵がアッと言つて不意を擊たれた狀態の、立直らない中に一擧に敵陣地の後に出てしまふこと（これがためには火力に速度が伴なはなくてはならない……急襲）。

等のことが出來ないかと、列國の俊秀をすぐつて創意工夫をしたのである。

兵器的戰法的奇襲として「ガス」が出た。その用法が次ぎ〳〵變化して敵を奇襲した。

併し相當な威力は發揮したけれども、遂に最終の目的には到達し得なかつた。

攻擊の當初はアッと言はせることが出來るが、これを保持增大する速度が出ない。歩兵の速度を出すためには機關銃の破壞が先決問題となる。

かくの如くして、少くも當時の主要兵器である機關銃、小銃の貫通しない裝甲をもつて（防護力）、敵の準備した鐵條網や拒馬や壕を乘りこえて、敵の陣地の中におどり込むことの出來る、即ち攻擊力、機動力のある兵器の出現を要請する狀態にあつた。

この時　彗星の如く現はれたのが戰車である。當時技術の幼稚、戰術思想の貧困は、この優秀なる兵器を以て十分その名を成さしむることが出來なかつたが、こゝに計りしることの出來ない幾多の教訓を殘して、第一次歐洲大戰の幕を閉ぢたのである。

この教訓の眞實なる研究者實行者は誰であつたらうか。第二次歐洲大戰が如實にこれを示してゐる。次に戰車發達の經過を、簡單に戰史實的に觀察しよう。

二　戰車の誕生

第一次歐洲大戰に於ては、西方戰場の陣地戰の狀態を脫しようとして、各種の考案がめぐらされて、遂に戰車の出現となつたことは既述の通りである。併し戰車（形は違つてはゐる）そのものの考案は極めて古いものであつて、後期舊石器時代、今から二萬——五萬年前頃からあつたとされてゐるが、現代戰車の發祥は第一次歐洲大戰からである。

戰車の眞の發明者はオーストリヤの(一九一一年頃)の一中尉であるとも言はれてゐるが、實際に實用化したのは、英國のスキトン中佐が、アメリカの農耕用トラクターからヒントを得て、裝甲無限軌道車によつて、塹壕と機關銃を征服しようとする案に發してゐるやうである。當初はタンク(水槽)の祕匿名を使つた。これが「タンク」なる言葉の發祥である。その發達の經緯を見るに、

一九一四年十月十四日
　スキトン中佐キッチナー元帥に意見具申したが採用せられなかつた。
一九一五年一月五日
　チャーチル海相(現首相)によつて採用された。
一九一五年八月十三日
　始めて二ヶ中隊をフランス戰線に送つた。
一九一五年九月十五日
　ソンム會戰中、四九輛の戰車を、バポーム市南方約六粁のフレール村に於て使用して或程度の成功を收めた。

併し深い準備研究も行はなかつたし、地形もよくなかつたために最後まで活動したのは約九輛にすぎなかつた。

その後度々使用したけれども、獨軍もこれに對して鋼心彈を準備したため、偉大な效果を收めることが出來なかつた。

然るに一九一七年十一月二十日、英軍はカンブレーに於て、防彈鋼板により裝甲せられた、四號型戰車を大規模に使用して獨軍を急襲し、偉大なる成果を收むることが出來た。

このカンブレーの戰鬪こそは、戰車を新時代の英雄たらしめた、記念すべき戰鬪であつた。

三　カンブレーの戰鬪

英軍はフランドル地方の數次の攻擊により、獨軍のアラス以南に於ける守備薄弱となりしに乘じ、一九一七年十一月二十日拂曉、カンブレーの前方約十二粁の正面に對し、歩兵六師團を第一線とし、これに戰車約四百臺を配屬して、急襲的攻擊を開始し、一擧に獨軍の陣地を縱深約九粁に亙り突破するに成功した。獨軍は戰車の急襲に對し、當初全く手の下しやうなく、後漸く砲兵によりこれを破壞するに至り、英軍の攻擊頓挫と相俟つて漸くその戰線を

保持するを得た。

左に獨軍の感想の一端を述ぶれば、

『驚く歩哨の目前に黑いものが突如として現はれた。それは火を吐きながら前進しつゝ、その壓力によつて障碍物が摺附木のやうに破碎された。塹壕には警報が傳はり、機關銃は跳び出して防戰して見たが何の役にも立たない。單に一臺の戰車ではないのだ。全線一粁に亙つて戰車が攻擊して來る。砲兵の阻止射擊も、手榴彈も一つとして防禦し得るものはないのだ。歩兵に對して怖るべき陣地も、今やこの優越せる兵器に對しては何等抵抗力を持たない　退却しようにもこの火力では如何ともし難い。唯死か、捕虜となるのみである』と。

英軍の奇襲はこのやうにして成功したが、十二粁の全正面に戰車を分散使用したため、陣地の全縱深突破には成功することなくして終つた。カンブレーに戰車が有效に使用せらるゝに至つてから、聯合國、獨國も共に盛んに戰車を使用するに至つた。

四　その後の戰鬪

一九一八年七月十八日の、聯合國のソアッソンに於ける反擊には、佛軍は約五百臺の戰車を以て、又同年八月八日の聯合國のアミアンの反擊には、戰車約四百臺（英軍三百十、佛軍九十）が參加してゐる。

一九一九年大戰終了當時に於ける列國の戰車數を見るに、

英	重戰車	七〇〇〇臺
佛	輕戰車	八〇〇〇—一〇〇〇〇臺
米	輕戰車	一〇〇〇〇臺
獨	輕戰車	八〇〇臺

右の如く聯合國の反擊は實に戰車により成功したとも見るを得べく、ルーデンドルフも亦獨逸の敗因の一は戰車の不足であると言つたのも頷くことが出來る。

一九一八年十一月停戰と同時に、列國共に戰車の製造は中止され、獨逸はベルサイユ條約によりこれが編制を禁ぜられた。

かくして第一次歐洲大戰は終つた。各國はこの偉大なる教訓を、如何に研究して本次戰爭に入つたであらうか、簡單に觀察して見よう。

五　第一次歐洲大戰後の戰車の發達

1、英　國

英國に於ける戰車の使用は、獨立的用法であつて、あくまで戰車の機動力を利用せんとするもので、『眞の裝甲は速度なり』と云つてゐる　これは廣大なる植民地掩護を主としたところから生れてゐるやうである。これより後輕戰車、中戰車の研究が盛んに行はれ、世界に先んじて機械化兵團の研究に着手した。併し一部の歩兵協同用戰車の必要を認めてゐた　特に軍機械化に對する熱意には相當敬意を表すべきものがあつた。

2、佛　國

佛國に於ける戰車は、その陣地戰の經驗に鑑み、歩兵直接協同を主任務とする、裝甲厚き戰車の研究に重點が向けられてゐた。機械化兵團的用法の研究は、一九三七年頃になつて開始された。由來佛軍は傳統的に優勢なる火力と重裝甲威力を尊重してゐたのであるが、この機械化兵團用法の研究着手はその機械化思想の一大飛躍と言はなければならぬ。

3、蘇　聯

ポーランドや蘇聯の如き惡路では、自動車や戰車の使用には適せないと云ふ議論が盛んであつたにも拘らず、蘇聯はその偉大なる重工業能力を以て、戰車の大量生産に着手した。

その用法は、英國流、佛國流の兩者併用主義であつて、やゝ直接協用法を重視した。その理由は縱深戰術の影響である。このやうに歩兵の補助兵器であつた戰車から、更に戰車師團、戰車軍の編制に、更に軍の全面的機械化へと研究は進められたのである　當時平和の世に於ては各國ともその實質的の實行は、一部にすぎなかつたけれども、祕密裡に行はれたる研究機關の爭鬪は深刻なものであつた。

4、スペイン國内戰

第一次歐洲大戰後に於て、戰車の發達に影響を與へたものに、スペイン戰爭がある　當時スペインは列國兵器の試驗場となり、政府軍には蘇聯製戰車が　革命軍には獨軍戰車が使用せられた。

スペインはその地形上、獨立的戰車用法には適當とせず、專ら歩兵の補助兵種として歩兵直協的に使用せられ、その效果も大であつた。その結果、戰車は歩兵直協式でなければならぬ、孤立挺進する戰車は、全く敵の餌食たるに過ぎぬ、と言ふ思想が兵學界に行はれ、フランスなどはその影響が相當强かつたやうである。

5、獨　國

この間に獨逸に於ては、グーデリアン等、機甲の先覺者が盛んに機甲の獨立的使用を主唱

し、特に一九一八年三月攻勢失敗の原因は、突破速度の不足にありたるとなし、機甲兵團こそ將來戰に於ける速戰卽決の唯一の手段なりと考へた。ヒットラー立つて再軍備を宣言するや、先づ大空軍を建設すると共に、これと併行して裝甲軍の建設に着手し、先づ騎兵師團を逐次裝甲師團に改編した。この裝甲師團が本次大戰に於て赫々たる武勳を立てるに至つたのである。この戰史は新聞紙上餘りにも有名であるから省略することとする。又今行はれつゝある戰爭に對し、戰車が如何なる地位を占めつゝあるかは、新聞紙上に於て勝敗の決定要素として、戰車を唯一のものとなし、且つその數字が日毎に厖大なるを示めしてゐる事實を指摘するに止めて置く。

第三節　戰車用法に關する思想

戰車用法には二つの思想がある。これを大略區分すると、歩兵直協用法、機動兵團的用法これである。

一　歩兵直協用法

この用法は軍の主兵はあくまでも歩兵である。隨つてこの歩兵の目的を達せしめるやうにすべての兵種は奉仕すべきである。戰車も又一種の移動性を有する裝甲堡壘として、直接歩兵の突擊を支援し或は集團し砲兵的效力を發揮する等、單に歩兵の攻擊に協力すべきであると言ふやり方である。このやり方は、戰車の火力と防護力とはこれを利用することが出來るが、機動力は歩兵の攻擊速度に規正せられるために、極度に減殺をされるために難點がある。又その使用の規模も大體戰術的用法の範圍を出ない。

この用法は歩兵の必要が消滅しない限りは絶對に必要な用法である。將來戰に於て歩兵と戰車が如何に進化し、如何なる形に結合するかと言ふ問題は、極めて興味深き研究問題であらう。

二　機動兵團的用法

これは戰車の大量を以て、戰車を主體とする兵團を編成して、これを大規模に獨立的に使用して、一擧に勝を決せんとするやり方である。隨つて前者の歩兵直協用法に於ては歩兵に奉仕するために、如何に戰車を使用しようかと言ふのが主眼であるが、これはこの兵團を全軍戰勝のために、如何に使用しようかと言ふのが問題になるのであつて、その主旨に於て又

作戰構想に於て、大いに異なるものがあることに注意すべきである。この兵團の中の戰車を如何に使はうかと言ふ問題ではないのである。このやり方は戰車の有する凡ゆる特色を、最高度に發揚せんとするものであつて、戰車用法の最も有力なるやり方であるけれども、一般の地勢に制限せられるところに難點がある。

右の二つの用法の何れを主とすべきかは、全くその國の國情、作戰方面の地勢等によつて定めらるべきものである。これは大變重要な問題であつて、國軍の軍備の大方針を定める、有力なる要素となる。然し何れの用法たるを問はず、軍の精强化、能率化を致すためには、軍が全面的に逐次機械化せらるべきことは、列國の必然的趨勢であり、現に目下實行せられつゝある事實は銘記しなければならぬ。そして吾人は平時より戰術を、技術を、研究し、優秀なる機械化戰の戰士とならねばならぬ。

右に研究した二つの用法の何れを問はず、戰車用法の大原則はおほむね左の四つに歸着することが出來る。

三　戰車用法の大原則

1、全軍戰勝のため最も緊要な時期と場所にのみ使用して絶對に濫用を戒めること。

戰車は最も强力な急襲的攻擊兵器ではあるが、不死身でもなければ萬能でもない。これに十分な活動をなさしめようとすれば、非常に厖大な整備作業が必要であり、且つ戰鬪による損耗が非常に多く、補充も又容易でないといふことを注意せねばならぬ。隨つて恰も便利屋の如く、一の會戰中に、彼處にも此處にもと、二重にも三重にも使用しようとするのは絶對に誤りである　戰車の全戰力をつぶしても惜しくないと言ふ、全軍の戰勝を決定する最重要な時機と場所に思ひ切つて使はなくてはならない。

2、急襲的に使用すること。

3、徹底的に大量を集結使用して、小兵力を逐次に或は分割して使用することは絶對に避けること。

4、他兵種特に强力精鋭なる歩工兵部隊、及び强大なる空軍の協力を必要とすることである。

古來敵の虚を擊つは兵法の奥儀である。戰車は攻擊力、機動力、防護力の三者を兼ね備へてゐるのであるから、自分の攻擊しようと思ふ方面に、最も神速に敵のアッと言つてゐる間に、且つ非常に强力な力を集めることが出來るのである。奇襲をやるためには最も好都合の

兵種と言はねばならぬ。又由來攻擊兵器と防禦兵器とは、相併行して進歩し、その止まるところを知らないものであるが、戰車もその偉大なる發達は、必然的にこれが對抗策である對戰車築城、對戰車火器等の著しい發達を招來した。特に對戰車火器の發達は逐次裝甲の發達を凌駕しつゝある。こゝで敵の準備しない狀態、即ち敵の虚を擊つと言ふことが絶對に必要となるのである。而して絶對的の虚を擊つことは出來ないから、相當程度の損耗を顧慮せねばならぬ。即ち戰車使用に當つては、敵の虚を擊つとともに、敵の對戰車火器に依る損耗をカバーして、而も陣地の後方に出て、十分に任務の達成出來る位の、大量の戰車を集結し、間髪を入れず連續的に使用して、敵の本格的對戰車組織の出來ない中に突破を完了することが必要なのである。即ち急襲一擧突破である　獨軍が今次對佛作戰に於て、通過不能と考へられてゐた、アルデンヌの森林を突如として前進し、且つ彼の厖大な戰車を、セダンの突破正面に徹底的に集中して（他の正面には一臺の戰車もさかなかつたと言ふ）、攻擊したやり方は以て範とするに足ると考へられる。故に兵力を分割し、或は逐次使用するが如きは、對戰車砲の餌食となるに過ぎない。今こゝでは戰論にある戰車の用法に關して述べたが、更に攻擊力に於て機動力、防護力に於て卓越した戰車を製作して、兵器的に全く敵を奇襲すると言ふことも極めて重要なことであつて、吾等銃後國民の重要なる一つの任務であることを銘記しなくてはならない。

第四節　對戰車砲と戰車

對戰車砲と戰車の關係を一言すると、戰車は挑戰辭戰の利を有するが、對戰車砲は本來防禦的である。即ち來たものを擊つのである。進んで擊つことは困難である。即ち戰車用法はあくまで攻勢的、自主的であり、對戰車砲はどうしても防勢的、彌縫的にならざるを得ない。こゝに戰車の乘ずべき非常に有利なる點が存するのである。且つ機動力と裝甲に至つては問題にならない。故に對戰車砲の火力と戰車の裝甲との關係をのみ論じてその戰力を比較し、戰車の急襲的攻擊などを度外視して、直ちに大部隊の戰力及び用法に及ぼすのは、危險極りなしと言はざるを得ないのである。故に地上に於て眞に戰車に對抗し得る資格を有するものは戰車である。第一次大戰の如く、未だ軍の機械化せられてゐない時代に於ては、戰車は敵の歩兵を求めて攻擊することが出來た。然し現代の如く全軍機械化せられたところに於ては、

勢ひ戰車對戰車の戰鬪が必然的に開始せられる。最も好都合の時に於ても、戰車的の速射砲即ち機械化せられたる速射砲との戰鬪が豫期せらるゝのである。戰車に對して他兵種の協力の必要は、戰車の特質に於て若干述べたから、こゝでは戰車と飛行機の關係を略述する。

第五節　戰車と飛行機との關係

飛行機は戰車に對し挑戰辭戰の利を有する。即ち戰車に對しあらゆる方向から攻擊が萬能である。故に飛行機に對して戰車が安全性を保持せんとせば、全面的に裝甲を改變しなくてはならない。而も現今襲擊機搭載火砲が逐次大となりつゝあるから、全周の裝甲による重量の增加は極めて大きい。又戰車部隊の中には多數の自動車を有し、機動兵團となるとその數は厖大なものとなる。これら自動車は飛行機に對し略ゝ無力に等しい。即ち飛行機は戰車の强敵である。將來は益ゝしまつに終へぬものになるであらう。機動兵團の如き神速な機動力を有する部隊の敵情搜索は、その大部分は飛行機の活動にまたなければならぬ。

（註）襲擊機とは、地上部隊攻擊專門の飛行機である。

昔の步兵の師團には搜索部隊として騎兵隊があつた。これはその機動力に相當の差異があつたから、騎兵隊の搜索の成果は十分に步兵師團によつて利用せられたのである。併し戰車部隊はその機動力に於て地上の王座を占めてゐる。隨つて他の何をつけても搜索隊の成果をうけて、主力がそれに基づいて決心する等と言ふことは略ゝ不可能に屬する。これを解決するものが飛行機の搜索である。古來我が豫期を以て敵の不期を擊つは兵家の尊重せる大原則であり、これを決するものは又搜索の先制に俟たなくてはならない。特に機動兵團の如く急襲的攻擊を本旨とするものに取つては、飛行機による搜索に對する依存性は絕對と言はなくてはならぬ。飛行機の協力なき戰車の戰鬪は盲目の戰鬪である。戰車の威力は强大である。然しこの强大なる威力を益ゝ大ならしめ、殆んど支ふるものなき怒濤の如き勢にするものは實に飛行機である。地上に數千の戰車が、空中に亂舞する數千の飛行機の協力を得て猛進する樣は、想像するだにも血湧き肉躍るではないか。この空地一體の大戰爭こそ實に現代戰の眞髓である。更に大規模にこの戰車が空中步兵（デサント）と協力し、或は空輸機械化部隊と結合するに至る空地一體化は、將來戰の極めて大きい研究問題であらう。和蘭作戰に於て獨の空中デサントが、「マース」の橋梁を占領し、機甲部隊の進路を開きしはその小規模な

る一端である。

第六節　戰車の戰術的用法

今まで説明した事項を背景として、次に戰車戰術的用法の細部に入ることとする。

一　歩兵直協用法

戰術的用法には歩兵の突擊支援兵器として使用せんとするものと、砲兵的に使用せんとするものと、稍〻戰略的に使用せんとするものとがあるが、我が戰車の兵力の大小、敵の準備の程度、地形等がこれを定める。次に各戰闘につき簡單に述べる。

1、遭　遇　戰

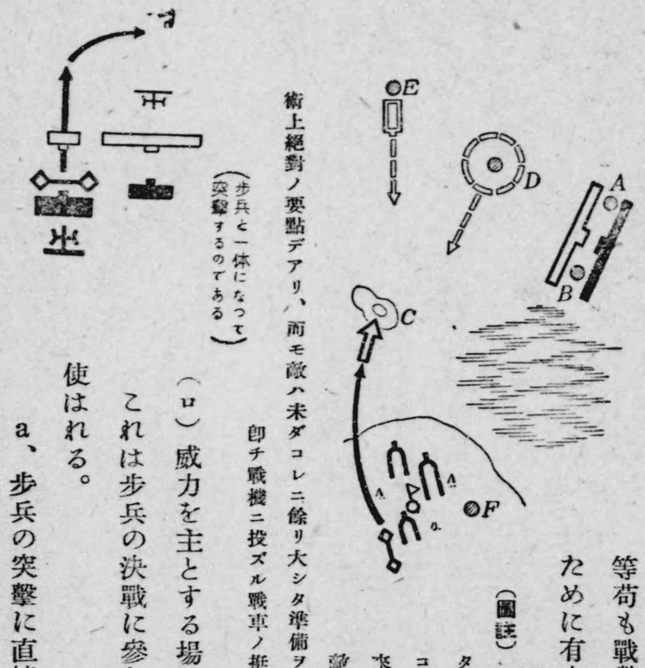
遭遇戰に於て戰車用法上最も大切なことは、戰機を主とするか、威力を主とするかにある。これは逐次戰闘か、統一戰闘かと同様である。

（イ）戰機を主とする場合

a、要點の爭奪

b、敵の展開を混亂に陷らしむ

c　砲兵司令部を急襲



術上絶對ノ要點デアリ、而モ敵ハ未ダコレニ餘リ大シタ準備ヲシテナイ。戰機ハ浮動スル一刻ノ猶餘モナラヌ、卽チ戰機ニ投ズル戰車ノ挺進ヲ必要トスル。

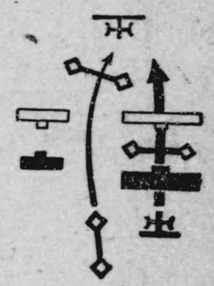
等苟も戰勢を左右すべき數機はこれを捕捉するために有力なる戰車を挺進す。

（圖註）師團ハ全ク企圖ヲ祕匿シテFマデ出ルコトガ出來タ。ソノ時D、Eノ敵ガC高地ニ向カヒ急進中トノコトガ分ツタ。師團ハ、C高地ヲ取レバ逐次ヤツテ來ルD、Eノ敵ヲ攻擊シヤスイ許リデナク、一擧ニ敵軍ノ背後ニ突進スルコトガ出來ル。卽チ高地ハ戰

（ロ）威力を主とする場合

これは歩兵の決戰に參加するのである。これは通常次の如く使はれる。

a、歩兵の突擊に直接協同する方法。



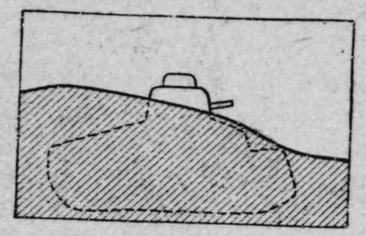
歩兵と一體になつて突擊するのである。

b、突擊に直接協同する戰車と、深く背後に突進する戰車に區分して用ふる方法。

これは戰車の兵力の大きい場合である。

2、陣地攻擊

既に研究した如く陣地攻擊は實力的な本質をもつから、周到なる準備の下に歩兵の最も必要な時機と地點に、戰鬪に加入して歩兵の攻擊に最も緊密に協力しなくてはならない。



そのやり方は大體遭遇戰に於ける、威力を主とする場合を最も周到に準備して、最も計畫的に行ふことになる。然し突擊の最初から使ふとは限らない。出來得べくんば砲兵の擊てる處は主として砲兵の威力により、砲兵の擊てない處より機を失せず歩兵に協同すると言ふやうにしたいものである。

二　防　禦

戰車は元來攻擊兵器であるから、防禦に於ても主として攻擊的に卽ち逆襲に用ひる。止むを得なければ「戰車トーチカ」となる。これはなか〳〵馬鹿にならぬ强さを持つ。

第八章　航　空

航空の發達は戰略戰術に革命的變革を齎した。前歐洲大戰に於て新兵器として出現した飛行機は、大戰間はなほ戰術的使用たるにとゞまり、歩兵の補助武力としての價値を有するに過ぎなかつた。大戰後列國共に將來戰を短期戰たらしめんとする、眞劍なる研究がつゞけられ、技術の急速なる發達と共に、獨立武力としての戰略的用法が考究さるゝに至つたのである。かくして空の攻擊及び防禦が獨立の戰場として現はれ、それと同時に多數の兵員、器械を要求するに至り、遂に事態は一變した。今次大戰に於ける獨軍の赫々たる戰果はその優勢なる空軍及び裝甲軍の勝利なることは萬人の認むるところであつて、實に最近までは理論的であつた空軍用法が、今次大戰によつて明瞭に實證され、將來戰の動向は好むと好まざるとに拘らず、大空軍大裝甲軍の決戰を以て至短時間に戰爭の運命を左右せんとするに至りつゝある。

石原莞爾將軍の航空機による一擧決戰の時代は、まさに現實の問題として、我等の眼前に髣髴として迫りつゝあるものを感ずる。

第一節　第一次歐洲大戰に於ける航空

飛行機は、一九〇三年、米國のライト兄弟によつて發明されて以來、日進月歩實に急速なる進歩をとげ、一九一〇年頃より軍用化さるゝに至つた。

第一次歐洲大戰開始當時に於て、既に各國共に軍若しくは軍團に若干の飛行中隊を有し、戰術的搜索及び連絡に使用した。一九一四年獨逸はタンネンベルヒの會戰に飛行機を使用活躍せしめ、英國はその飛行機を和蘭の飛行場に着陸せしめて友軍から敵情を聽取して基地に歸還する等の方法に據つてゐた。然しながら飛行機自體の武裝も不完全であつて、操縱者自ら拳銃、機銃を手に持つて搭乘する狀態だつたので戰鬪には使用されず、專ら騎兵の搜索を補足したに過ぎなかつた。

一九一五年陣地戰時代に入つて飛行機も急速な進歩をとげた。

その第一は偵察、爆擊、驅逐等の分科を生ずるに至つたことである。

佛國が先鞭をつけたのであるが、偵察機は砲兵觀測、寫眞搜索等に使用さるゝに至り、爆擊機は爆彈を手によつて投下する等、不完全の方法ながら爆彈を戰場及び後方諸施設に投下して、當時全く對空顧慮の拂はれてゐなかつた軍需品の集積、交通施設、工場等にその威力を發揮することが出來た。驅逐機は旋回機銃を以て敵機と併行の姿勢から射擊し、これを擊墜するに努めたが、その用途は寧ろ消極的で、自國の爆擊機、偵察機等を掩護し、侵入して來る敵機を驅逐するを主務としてゐたやうである。

一九一六年、プロペラに聯動された固定機關銃の製作に成功するや、空中戰鬪華やかなる「アス」戰法の時代を現出した。これは空軍に於ける騎士戰法の時代とも稱すべく、獨佛、英、各國共に著名の「アス」を輩出した。獨の「ベルケ」「リヒトフォーヘン」「インメルマン」フランスの「ギンメール」「フォンク」英國の「ビショップ」「リュカース」卿等がこれである。

（註）「アス」はトランプのポイントを云ふ。轉じて第一流者を意味する。

一九一七年、各國の航空兵力は益〻擴充せられ、その用途も亦極めて廣汎となつた。特に

獨軍に於ては、米國の宣戰に對抗するため、航空の劃期的大擴張を以てこれに當り、二千機を數ふるに至つた。ペタン元帥佛軍總司令官たるや、佛國亦これに對抗し、航空の急速擴充は次第に大空軍建設の形態を整へ來たつたのである。

偵察機の用法は、組織的統一的となり、寫眞偵察も大規模に實施せらるゝに至つた。

一九一六―一九一七年のヴェルダン戰、ソンム戰に於ては、近時蘇聯軍の賞用する襲擊機の前身とも見るべき、歩兵直協機（獨）を生じ、敵地上軍隊を掃射し、又驅逐機も遂次大單位編制をとり、獨軍に於ては聯隊の編制をとるに至つた。

爆擊機は、重爆による夜間戰略目標に對する爆擊、晝間輕爆による戰術目標に對する爆擊が行はれ、航空部隊の戰術的用法の基礎はおほむねこの時代に完成したと云ふことも出來よう。

一九一八年六月、英國に於て始めて空軍を陸海より分離し、陸軍に協力せしむる他に、獨立して敵航空戰力の擊滅に任ぜしむるに至つた。これは空軍獨立の濫觴をなすものであつて、當時佛軍に於ても飛行師團の編制成り、空軍の用法は次第に戰略的にならうとしてゐたが、第一次歐洲大戰は戰略的運用に關する結論を見出すことなくして終息した。

第二節　第一次歐洲大戰後に於ける航空

飛行機の性能向上、特に爆擊機の著しい發達と共に戰後航空の進歩目覺しく、單に軍用のみならず商業用として顯著な發達を遂げ、歐洲及び米國は殆んど航空路網を以て覆はれるに至つた。又大戰末期に存在した晝間爆擊機、夜間爆擊機、晝間驅逐機、夜間驅逐機、快速驅逐機、偵察機等多種多樣の飛行機は、動員上、生產上及び戰時に於ける使用上の便宜から努めて型を統一し、種類を減じ、多用途の飛行機を生產使用する傾向を辿ることとなつた。

航空用兵の見地から見る時、第一次歐洲大戰終了直後、空軍萬能論を唱へたものに伊太利のドゥーエがある。彼は伊太利の特種事情に鑑み、地上兵力は寧ろ消極的防禦に止まるべきで、將來の決戰は空軍によつて行はるゝ旨を强調した。この思想は伊太利空軍建設の理論的基礎をなしたのみならず、又歐洲諸國の兵學界に甚大な影響を與へた。左にドゥーエ空戰論の根柢ともなるべきものを紹介しよう。

『陸及び海に於ては防禦は易く、攻擊は難くして損害が多い。あらゆる武器の威力が進歩

するほどこの事實は益〻尖鋭化して來る。これに反して空には防禦なるものがない。敵の防禦力は微弱なるがために攻擊は容易である。化學戰の手段を用ふれば、たとへこれを制限を以て使用するとも空襲は偉大なる效果を擧げ、以て短時日に勝敗の決を與へることが出來る。およそ勝利は攻擊によつて得られるが故に、陸及び海に於ては防禦を固め、空に於ては徹底的攻勢をとることを戰の最上策とする。從つて一國國防の計を建てるに當つては、陸海軍備を制限し、これを空軍に傾注すべきである。かくして戰勝決定の重點は必然的に空間に移され、この考を實行するには空中戰鬪力の集團的攻擊を必要とする。如何なる飛行機も副次的目的のために徒らに飛行隊より取り去つてはならない。かくて陸海軍協同の飛行機は廢止し、防禦部隊の驅逐機並びに偵察機は最少限度に制限するのである。

空軍の第一任務は敵空軍の地上組織、飛行場等の壞滅及び敵の致命的中心を襲擊爆破し、以て空における覇權を獲得することである。故に空軍は敵の空軍と決戰せんと欲して徒らに時を喪つてはならぬ。敵は常に戰を回避し得るが故である。即ち空軍は敵の致命的重要施設を破壞することによつて制空權を獲得しなければならぬ。

空軍は凡ての役に立つ小使女の如きものではない。それは就中空中戰を遂行し、以て戰勝を決するための武器である。吾人は一切の偏見を放擲し、陸海各個の利害にとらはれることなく、問題を全面的に考察すべきである。將來戰に於ては制空のみがよく究極的勝利を創るのである。制空はよく全國民及びその生産を敵の空襲より防ぎ得るのみならず、陸軍及び海軍をして十分にその威力を發揮せしめ、反對に敵をして戰鬪上絶對不利な條件に追ひ込むのである。

吾々の任務は、一地域、一空域、或は一海域内の作戰のための何らかの戰鬪方法を見出すといふことではない。自國民、自國軍、自國艦隊を能ふ限り有效に敵の空襲より守り、逆に敵國民及びその空軍を自己の勢力圏内に包括して、これを完全に牛耳ることである。そのためには即ち所有する飛行機の全力をあげて、統一的な一大密集飛行編隊を作り、これに制空權獲得のための空軍戰遂行の任務を與へねばならぬ』と。彼はこの軍事的制空の卓見を以て、「空軍に於けるクラウゼヴィッツ」と稱せられるに至つた。

第一次歐洲大戰當初騎兵の搜索補助の任務を以て發足した航空隊は、やがて飛行機そのものの進歩と各種の體驗とにより若干の戰術的任務をも遂行し得ることが確認されたが、一九二五年以降に在つては單に戰術的任務を遂行し得るのみならず、戰略的任務をも遂行し得る

ものなることが立證され、伊太利のドゥーエ、米のウイリアム・ミッチェル、英のケンヴォシー等は空軍萬能論を唱へた。當時これ等の新說に對しては對立意見も多かつたが、原則として漸次これ等の說が勢力を占め、第一次歐洲大戰後は各國共に空軍建設に非常な勢力を拂ひ、日本、米國を除く外、列國は逐次空軍の獨立を敢行した。而して、列國の空軍獨立の狀況を見るに左の通りである。

英國	一九一八年
伊太利	一九二五年
佛蘭西	一九二八年
獨逸	一九三五年

獨國は前大戰に於ける戰敗の條件として、軍用機の建造を禁ぜられたが、蘇聯及び和蘭等に於て民間航空機の建造、研究に努力し、一九三三年ヒットラー總統政權を握るやゲーリング元帥の適切なる補佐の下に、たちまち英佛兩國空軍を壓倒するに足る大空軍を建造し、獨逸復興の基礎を作り上げたのである。

その兵力增加比率を見るに、左の如く誠に刮目に値するものがある。

英國	獨立した年 1918年	理由
	軍政的原因	1. 制空權の絕對必要性（豫想敵國の空襲圏內にある） 2. 陸海分屬に依る弊害を除去 3. 補助兵科として分擔し得ざる空軍問題を解決
太利	1925年5月	
	作戰的原因（ムッソリーニ獨裁） 觀念的作戰思想	・ドゥーエ將軍の革新思想の影響 2. 大空軍を急速に建設せんがため 3. アルプスを越えて行ふ對佛作戰のため
佛蘭	1933年4月	
	政治的原因	1. 航空の各省分割による政治的複雜の除去 2. 航空兵科の特性の認識 3. 商業航空不振の對策
獨逸		
	作戰的原因	1. 前大戰の教訓 2. 大空軍建設の前提として獨立 3. 列國の趨勢による刺戟

一九三三年	一二中隊
一九三五年	七〇中隊
一九三七年	一四〇中隊
一九三九年	五五〇中隊

各國空軍獨立の理由は、各〻その國情により異なるが、これを要約すれば右表(二一二頁)の如きものとなる。

第三節　近代空軍の組織

獨立空軍を建設した列强は、多少その制度を異にするが、軍民航空行政の統一强化、器材、技術、航空業務の統一指導、國内氣象業務の統一等、一國航空關係事項を打つて一丸とする中央統轄機構を組織し、航空國策の一元化とその發展を期してゐる。

空軍の獨立はその必然の結果として、陸、海、空の三軍を統制するの必要を生ずるのである。獨逸、蘇聯は國防省を設けて統一してゐるが、英、佛、伊の各國は空軍省又は航空省を設けて、空軍の軍令、軍政を陸、海兩省と對立關係に於て統轄してゐるので、各國特殊の制度を以て別途に三軍の軍令又は軍政の一部を統制してゐる。

而して空軍は數個の航空軍及び航空廠等の後方補給修理機關より成り、各航空軍は一乃至數個の飛行師團並に氣象、情報、通信等の直屬部隊をその隷下として編成されてゐるのが現在各國共通の事象であつて、飛行師團内には若干の飛行旅團があり　旅團内には二乃至三個の飛行聯隊及びこれに附屬する飛行場部隊がある。又飛行聯隊は數個の中隊から成り、中隊は更に三機乃至五機より成る若干の編隊に區分せられるのを通常としてゐる。

第四節　近代戰に於ける空軍の用法

一　飛行機の種類とその用途

空軍の用法を述べるに先立つて、先づ各分科飛行機の種類とその用途に一瞥を與へることにしよう。

戰鬪機—驅逐機とも稱呼されるものであつて、敵機の攻擊、驅逐を主任務とし、これが

ため敵機を擊墜するに足る機關銃、火砲を裝備し、航續力比較的短きも、速度大、上昇性能、旋回性能は特に優秀なのを通常とする。一般に單座である。長驅敵後方要地を爆擊する爆擊隊掩護の必要上、近時火器の裝備を更に向上し、航續力を增加した多座の重戰鬪機が現出してゐる。

爆擊機—敵の重要施設を破壞し、狀況によつては地上軍隊を攻擊してその戰力を破摧するを目的とし、爆擊のため爆彈を搭載する他、敵機の妨害排除のため機關銃、火砲をも裝備してゐる。航續力長きを特色とし、乘員は操縱者、爆擊手、通信手、機關銃手等數名より成り、飛行機の型體大で從來速度は比較的遲かつたが、近時速度は著しく向上され、爆彈も翼下懸吊式は漸次影を潛め胴體內部に收容されることとなつた。

敵地上軍とその諸施設及び敵空軍最前線部隊に對する攻擊を主任務とするものに輕爆擊機があり、遠距離に進攻し敵要地の爆擊を主任務とするものに重爆擊機がある。

前者は主に急降下爆擊を用ひ、後者は主として高々度の水平爆擊によるのを通常としてゐる。

獨逸の急降下爆擊は前者に屬し、米の空の要塞ボーイングの如きは後者に屬してゐる。

襲擊機—地上軍攻擊を任務とし速度、航續力は餘り要求されぬが、機關銃、機關砲の他に小型爆彈を積載してゐるのが普通である。

偵察機—搜索により主として高級指揮官の指揮を容易ならしめ、又各兵種特に步兵、砲兵と協同してその威力を十分發揮せしむるのを任務とする。從つて遠く進出して行ふ戰略的搜索に任ずるものは、快速を第一の特色として航續力長く、武裝は比較的輕きを一般とするが、步砲協同用のものは速度は餘り要求されず航續力もさほど長い必要はない。

兩者とも優秀な寫眞機を裝備してゐる。

その他連絡機、輸送機等がある。

近時一般に各機種とも速度大となり、各國何れも時速八百粁を目標に精進を續けてゐるが、この反面自衞上搭乘者の座席或は機內要部の防護のため厚き裝甲鈑を使用すると共に、攻擊力增加のため裝備火砲の口徑は益〻大となりつゝあり、又特に爆擊機に在りては一萬米以上の高空を行動し得る成層圈用飛行機の完成に努力が傾注されてゐる。

二　空軍の用法上の三主義

空軍の獨立に伴なひその用兵思想にも一大變革が齎された。

當時兵學界に於ては、

1、空軍の獨立的用法を主義とすべきや

2、依然陸海協力を第一義とすべきや

3、兩者併用主義を以て進むべきや

等の議論が繰返され、英佛は依然陸海協力に重點をおいてゐたのに反し、獨軍は兵の全武力を集中して空軍の獨立的用法に徹底し、蘇軍はその厖大なる軍需生産力を頼み兩者併用主義によつてゐる。

三　航空決戰

近代戰の開始が航空決戰を以て始まることは、新しき戰史のこれを教ふるところであり、制空權を獲得して我が空軍の活動を自由ならしめ、且つ敵空軍の行動を制壓することは地上作戰を有利ならしむるのみならず全軍戰捷の途を開くため緊要缺くべからざる事實である。而して緒戰に於ける敵飛行基地に對する第一擊の成果は、爾後に於ける敵航空勢力の恢復に大なる影響を及ぼし、ひいて陸（海）戰の迅速なる戰果に決定的影響を持つものである。獨逸・ポーランド戰に於ける獨軍の勝利は、實に最初の二日間に決せられたりとも見るべく、獨佛の勝敗も、最初の五日間に決定せられたと見るべきであらう。

大東亞戰に於て緒戰の迅速なる勝利も、我が優勢なる陸海空軍を以て敵を急襲し、ハワイに、マニラに徹底的打擊を與へ得たことによる。然しながら航空の戰力恢復は、比較的迅速であつて、制空權の確保は時間的に絶對ではない。敵が大なる軍需生産能力を保有してゐる場合に於て特に然りとする。

こゝに於て、戰爭の長期化するに伴なひ、不斷に航空決戰が行はれ、互に制空權を確保して陸海作戰を容易ならしむる如く企圖するに至るのである。特に近代海戰に於ては制空權は絶對の要求であつて、制空權なき艦隊は空しき鐵塊に等しく、徒らに好餌を敵に與ふるに過ぎぬ。

さて航空決戰實施に方つては敵飛行場を攻擊するか、或は在空中の敵航空部隊を擊破して敵航空勢力の撲滅を圖ることとなるが、これがためには各分科飛行部隊の適切な使用と相互の緊密な協同連繫が極めて緊要であるのみならず、この作戰は純戰略的用法に屬するが故に特に作戰の全局に着眼し、攻擊の時期及び方向の選定に方りては十分愼重な顧慮が拂はれねばならぬ。又本作戰も一般作戰と同樣我が企圖を嚴に秘匿し、敵の不意に乘ずる奇襲に成功

しなくては目的の達成は十分出來ない。

1、敵飛行場の攻撃

敵飛行場の攻撃は海軍に在つては航空母艦の攻撃ともなる。敵飛行場を攻撃して器材特に飛行機を完全に破壞する時は永く敵航空部隊の活動を制壓し得べく、又縱ひ飛行機を完全に破壞し得ぬ場合にも、好機に投じた攻撃は格納庫、滑走路、兵舍等飛行場の諸施設及び燃料、彈藥に損害を與へ、重要な時機に於ける敵機の活動を制肘し得るものである。

然し敵は近時特に數箇の飛行場より成る飛行場群を點々と設け、使用飛行場を屢〻變換するのみならず、或は他の飛行場に飛行機を移動し、或は空中に逃避し、又各種の手段を盡くして飛行機の所在を秘匿することあるを以て、攻撃實施に方つては捜索を綿密にすると共に企圖の秘匿に注意し、敵の術中に陷り、徒らに我が兵力を消耗するが如きことがあつてはならない。

この攻撃は主として爆撃隊の任ずるところではあるが、特に戰鬪機隊をこれに協同せしめ反撃し來る敵機を撃破し、空中逃避又は他に移動を企圖する敵機を捕捉撃墜せしむる時は、更にその成果を擴大することが出來る。又狀況によつては戰鬪機隊も銃撃を以て地上敵飛行機を撃破し、或は地上の人員、彈藥、燃料等に損害を與へることもある。

2、在空敵航空部隊の攻撃

戰鬪機部隊を以て在空する敵機特にその戰鬪機隊を壓倒殲滅する時は、敵航空勢力減殺のため價値大であつて、特に敵戰鬪隊主力に對して決戰を强要し、一擧にこれを破摧するは制空權獲得のため極めて有利であるのみならず、器材に比し補充更に困難なる操縱士の損失を與へる點に於てその效果絶大である。

四　陸(海)作戰直接協力

敵空軍に對する決戰によつて、徹底的打撃を與へたるときは、主力空軍は陸(海)作戰に直接協力し、その作戰を容易ならしめる。

今次獨逸・ポーランド戰及び獨佛戰の經緯を見るに、ヒットラーはその轉移の時機を極めて注視し、自ら裁斷を下してゐる。

これは主力を以て地上決戰に協力せんとする時には、敵空軍に對する作戰は、自ら不十分となり、若し敵空軍の有力なるもの存在しあるときは、航空決戰は極めて不利となるからである。

支那事變に於ける陸軍航空は、殆んど地上作戰に直接協力するのを以て終始したが、これは敵に優勢なる空軍がなかつたからであつて、今次大東亞戰に於ては、陸海空軍は先づ擧つて航空決戰をマライ、フィリッピン、ハワイの敵空軍に求め、これに徹底的打擊を與へた後、各〻密接に陸（海）作戰に直接協力してゐるのである。

五　戰略要地の攻擊

戰略要地の攻擊は、前大戰當時既に試みられた。その著名なのは、パリー、ロンドンの空襲である。今次大戰に於ても、獨、佛、英、蘇互に首都、軍需工業都市等一國の死命を制すべき重要都市の爆擊を實施し、その慘害、經濟、運輸機構の混亂或は神經戰的な頻繁なる空襲による國民の疲勞困憊により、國民戰意の喪失、生產の低下等に努力し、我が皇軍も幾度か重慶、成都、蘭州等に戰略爆擊を敢行してゐる。近代戰が國家總力戰であるだけにその效果は甚大なるものがある。

又兵力を空輸して落下傘により降下せしめる要地攻擊も行はれてゐる。抑〻この落下傘部隊は、ソ聯、佛蘭西に於て始められたものであるが、實戰に始めて使用したのは獨逸であつた。皇軍もパレンバン及びメナドの攻略にこれを使用し偉功を奏した。從來の經驗によれば兵力約一ヶ師團、我が所要の火砲、戰車をも降下せしめ得るとのことであるが、孤立無援遠く敵中に進入するため、要地占領の場合適時地上作戰軍との連絡なり密接な協力が必要とされてゐる。

この作戰には多量の輸送機を必要とするため、一回乃至數回に亙つて輸送が行はれ且つ兵員及び器材は別個に投下せられるため、搭載の組合せ、降下の順序等には周到な注意が肝要であり、降下實施に方つては奇襲によること勿論であるが、豫め敵航空戰力の撃破が緊要になつてくる。戰略要地の攻擊は、現代空軍の力を以てしては、未だ戰爭の終末を齎すに至らないが、飛行機の飛躍的發達が、將來に於てこれを以て戰爭の決を齎すべき決定的戰爭手段たるに至らしたことは疑を入れぬところである。

六　航空機による兵力輸送

大型輸送機（デサント）、グライダー曳航等、航空機による兵力の空中輸送は、今次大戰に於て新たなる戰法として出現した。發動機の裝備を必要とせぬため、輕量で搭載量が多く、且つ生產費低廉、重用金屬を多量に要せぬグライダーの利用は注目に價する。この種の戰略戰術的運用はなほ將來の研究問題で、目下各國共鋭意研究努力中であるが、航空機の發達は、

更に重裝備、大兵力の至短時間轉送を可能ならしむるとすれば、戰略戰術の運用に於て革命的考案が生るゝものと考へねばならぬ。

現在小規模ではあるが米國は北方アリューシャンの航空路を通じてソ聯に飛行機その他の資材を輸送する一方、更に南方に於てはブラジルを基點として南大西洋を横斷、アフリカ、印度を經由の上ヒマラヤ山系を越えて重慶側に飛行機、人員その他の重要資材を空輸してゐる。

第五節　航空器材が空中戰鬪に及ぼす影響

航空器材の良否が空中戰鬪に及ぼす影響は、直接空中戰鬪に影響を及ぼすのみならず、その戰鬪法にも一大變革を齎し、日進月歩して止まない。

一　器材進歩の迅速性

空軍は現在發達過程にあるだけ航空器材の進歩は實に迅速であつて、今日の優秀機は忽ち明日の劣等機となる。而して航空機の特質上飛行機の性能の可否が、直ちに空中戰鬪の勝敗を決定する。

（列）

國名	機名	用途	要
イリギス	スピットファイヤ 1	驅逐用	
	ハリケーン	同上	
ドイツ	メッサーシュミット Me 109	同上	紆/時 (2) 機銃及ビ砲 塔載スルモノアリ。
	ハインケル He 112	同上	翼ニ2Mg.或ハ胴體 砲2,改造ニU型アリ。
	メッサーシュミット Me 110	隨伴用重戰鬪機	耗砲2,.9耗回銃4 回Mg1
アリメカ	カーチス P—40	驅逐,追擊	2—3. 英國及ビ重慶
	グラマン F4F—2	海軍用	
ソ聯	イー 16	格鬪用	且ツ出足迅速水平旋 び13耗

（列）

國名	機名	用途	要
イリギス	ブリスルトル・ブレンハイム1	爆擊兼偵察	
	ロックヒード・ハドソン	同上	
ドイツ	ユンカース Ju87 B	急降下爆擊	
	ドルニエ Do215	爆擊兼偵察攻擊	
アリメカ	マーチン 167	同上	8
	ボーイング B—17B	遠爆	機首部,上部主翼後緣 塞ト稱セラル
ソ聯	エス・ベー	中爆	ン中爆ニ近似ス
	テー・ベー 5	重爆	7 アルベシ

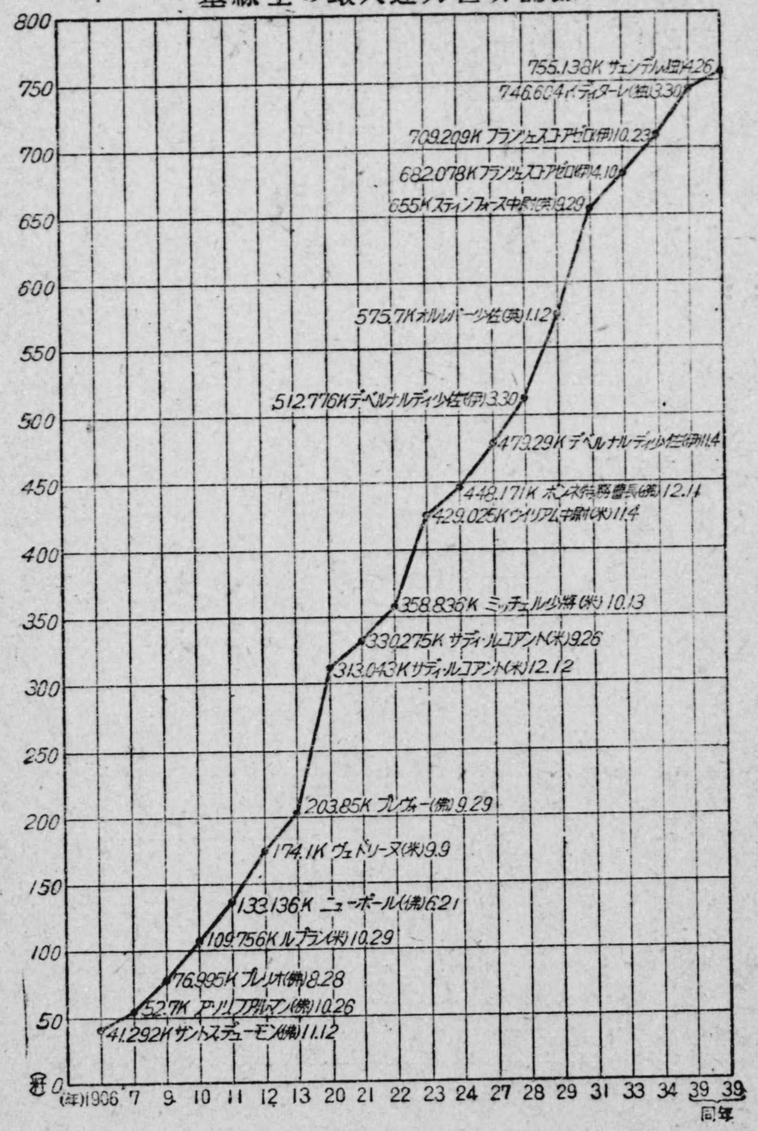
(列國主要戰鬪機要目表)

國名	機名	用途	乘員數	機 馬力	機 基數	速度 最大(粁時)	速度 巡航(粁時)	航續距離(粁)	上昇速度	上昇限度(米)	武裝 機銃	武裝 砲	爆彈塔載量(瓩)	摘要
イリ	スピットファイヤ1	驅逐用	1	1030—1050	1	560—590	530	900	3:50米迄4.8分	—	8	ナシ	ナシ	機銃ハ翼ノ左右ニ4宛
ギス	ハリケーン	同上	1	1030—1050	1	540	480	880—960	6100米迄9分	10370—11900	8	ナシ	ナシ	同上
ドイツ	メッサーシュミット Me 109	同上	1	1070—1150	1	570—600	480	1000	1020米迄1分	11000	2或4 (1)	2 (1) (2)	— (50)	(1) 109R型參考最大速度 775粁/時 (2) 機銃及ビ砲ノ裝著ハ種々アリ，爆彈50kg 塔載スルモノアリ。
	ハインケル He 112	同上	1	1070 (675)	1	575 (485)	455	1150	4000米迄5分 (同米迄6分)	9500	4或2	(2)	60	武裝ハ胴體前方ニ2Mg.左右翼ニ2Mg.或ハ胴體前方ニ2Mg.左右翼ニ20粍砲2，改造ニU型アリ。
	メッサーシュミット Me 110	隨伴用重戰鬪機	2	1070—1150	2	565	400	1320—2500	—	13000	4—5	2	ナシ	偵察，襲擊ヲ兼ヌ，武裝ハ20粍砲2，7.9粍回銃4箇（共ニ胴體前方）後方ニ旋回Mg1
アリ	カーチス P—40	驅逐，追擊	1	1000	1	570	482	1100	6000米迄6分	10500	2—3	ナシ	ナシ	武裝ハ胴體首部上ニ固定Mg2—3. 英國及ビ重慶ニ輸出サル
メカ	グラマン F4F—2	海軍用	1	1000—1200	1	530?	540	1800	—	8544	6	ナシ	ナシ	
ソ聯	イー 16	格鬪用	1	700—800	1	450	330	650	5000米迄6分	10000	4	ナシ	60	對爆擊機用ニシテ降下速度大且ツ出足迅速水平旋回性能不良，機銃ハ7.6粍及び13粍

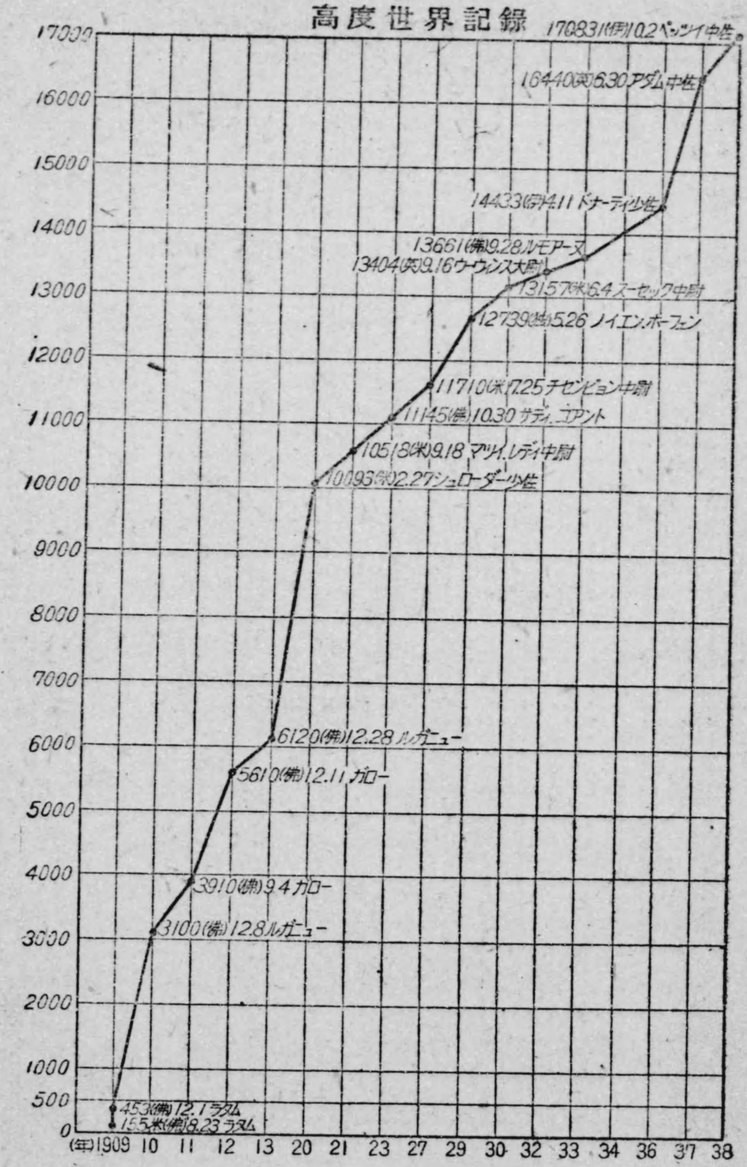
(列國主要爆擊機要目表)

國名	機名	用途	乘員數	機 馬力	機 基數	速度 最大(粁時)	速度 巡航(粁時)	航續距離	上昇限度(米)	武裝 機銃	武裝 砲	爆彈塔載量(瓩)	摘要
イリ	ブリスルトル・ブレンハイム1	爆擊兼偵察	3	840	2	450—470	400	1800—3000	8310	3	ナシ	900	頭部改良型ニ Ⅱ型アリ
ギス	ロックヒード・ハドソン	同上	4	1000	2	380—400	334	1600—3200	6870	4	ナシ	1500—2200	米國ヨリ購入
ドイツ	ユンカース Ju87B	急降下爆擊	2	1100	1	400	370	850	8500	3	ナシ	750	
	ドルニエ Do215	爆擊兼偵察攻擊	4	1050	2	500	405	3000	9000	4	ナシ	1000	ドルニエDo17ノ改良
アリ	マーチン 167	同上	3—4	1000	2	470	—	4000	8870	6	ナシ	500	
メカ	ボーイング B—17B	遠爆	9	1000	4	420	340	800—1600 —4800	6500	5	ナシ	1000—3000	機銃ハ12.7粍4，7.6粍1，（胴體首部，上部主翼後緣上，下方主翼緣後方）空ノ要塞ト稱セラル
ソ聯	エス・ベー	中爆	3	800	2	420	310 —330	1700	8500	後方ニ双連後上後下方單銃	ナシ	500最大800	ソ軍快心ノ傑作，米國マーチン中爆ニ近似ス
	テー・ベー 5	重爆	7—9	850—900	4	360—450	400	3000—4000	8000	7.7～13Mg ×5～6	ナシ	2000—3000	超重隊トシテ一部懸催セラレアルベシ

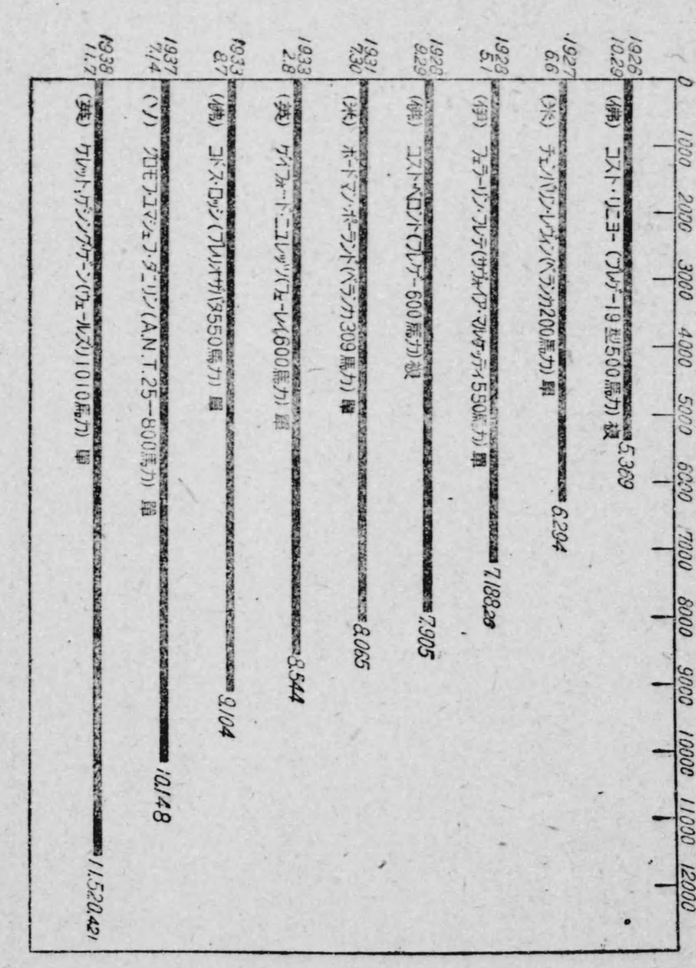
基線上の最大速力世界記録



高度世界記録



直線航續距離世界記録向上圖



飛行機進歩の跡を統計的に觀察するに　飛行機性能を代表する速度について見れば、前表の如くである。

現在世界の優秀機である獨のメッサーシュミット一一〇は最大五百六十粁、英のスピットファイヤは五百九十粁、米のロックヒードは六百五十粁に達すと稱せられ、世界の水準は今や時速八百粁に達せんとして、人體能力の堪へ得る最大限に近づきつゝあり、又發動機プロペラの回轉數は今や音響速度に迫らんとし、現在使用されてゐる飛行機の構想に於てはその限度に達するのもさう遠い將來ではあるまい。

二　質　と　量

飛行機の生命は、實にその質の良否によることは前言せし通りであるが、これと共に量も亦作戰の死命を制する一大要件である。

則ち舊式機は新鋭機の到底敵ではなく、從つて戰時は勿論平時に於てすら機種更新の問題に當面するのみならず、飛行機の生命短く衰損早きため、同一機種に於てすら常に交換を必要とする。然も一會戰に於ける飛行機の消耗は極めて大であつて、これが補充の良否は實に航空作戰の勝敗を決定的ならしめる。

『英人は述べてゐる『航空工業は空軍の第三豫備隊である。第一は現役航空隊で第二は豫備飛行機、第三の最も強力なものが航空工業である。而も危急の際の空戰緒戰に於て避け難い飛行機の損失を出來るだけ迅速に補塡して行くのは、實にこの航空工業の最高能力の發揮による』と。

ポーランド、佛蘭西兩國が獨軍の第一擊に會つて忽ち制空權を失ひ、再び立ち直ることを得なかつたに反し、量の厖大なる蘇軍は、獨軍の急襲により大打擊を加へられたるに拘らず、その縱長戰力を以て果敢なる空中反擊を實行しつゝある。大東亞戰に於けるアメリカ空軍の執拗なる反擊も、實にその縱長なる量の保有によることを銘記しなければならない。空軍の戰略戰術的運用に關しては、航空機の性能が直接重大な影響を及ぼす關係上、不斷の技術的研究が結局戰鬪の勝敗を左右するとも謂ひ得る。

石原將軍の所謂發明奬勵の緊要なるは、この航空部面に於て特に著しきものあるを知らねばならない。

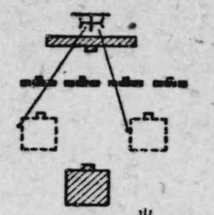
第六節　戰場に於ける防空

敵飛行機の攻擊に對し、戰場に於ける軍隊、並びに重要諸施設を掩護することは極めて重要である。その最良の方法は、我が空軍によつて敵空軍に徹底的打擊を與へ、制空權を確保するにある。併しながら、常續不斷に制空權を確保することは、空軍の特質　卽ち卓越せる機動力を利用して行はれる敵兵力の增加、並びに我が飛行機の在空時間の制限等により、これを望むことは中々困難である。又たとへ制空權を我が手に握つてゐる場合に於ても、敵の潛入攻擊は覺悟しなければならない。こゝに於て戰場防空を適切ならしむることは、我が戰力を保持するために極めて重要となつてくるのである。卽ち各部隊ば、對空火器を裝備して敵の擊墜をはかる許りでなく、消極的には分散、遮蔽、僞裝等によつて、損害の減少に努めるのである。

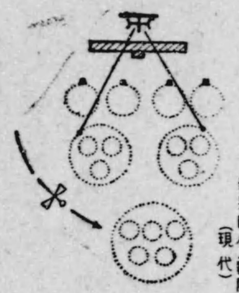
一　對空火器

對空火器には、高射砲、高射機關銃(砲)等があり、その機能を十分に發揚せしめるため、

小銃時代(橫隊縱隊戰術)
(フリードリヒ大ポレオン時代)



火砲時代(疎開戰術)
(第一次歐洲大戰時代)



航空時代(戰鬪群戰術)
(現代)

聽音機、照空燈が併用せられる。高射砲は主として中空一千米以上)以上の目標を射擊するやうに結構せられ、一千米以下の低空は高射機關銃(砲)その他の火器でもつてこれを補ふ。近時敵航空機の爆擊が、非常な高度から行はれるに至つた結果、高射砲も逐次七—八千米の上空を射擊出來るやうに結構せられやうとしてゐる。

二　分散、遮蔽、僞裝

敵機の損害をさけるがためには、軍隊は廣く分散、疎開して配置せられ、その損害を極少にとゞめるやうに着意せられねばならぬ。火砲が戰場の主宰者であつた時代に於ては、分散、疎開は火砲射程の範圍に限られてゐたから、その後方に於ては、密集した隊形を以て前進し、或は休宿することも可能であつた。然しながら現時に於ては、地上の敵とお目見えせぬ以前に於て、すでに上空

からの攻擊を豫期しなければならなくなり、戰線たると後方たるとの區別は、全く消滅したと申しても過言ではない。かくて軍隊は自然に廣い地域に、絣模樣に卽ち石原將軍の面式に、分散配置せられるに至つたのである。

この關係を圖示して見ると右のやうになる。

飛行機に對する僞裝の價値は極めて大きい。勿論空中寫眞、特に赤外線寫眞等に對しては、僞裝の價値は少いけれども、敵の目視に對しては、十分これを欺瞞しうるものである。僞裝作業も逐次大げさになり、前大戰末期に於ても、すでに僞裝都市なるものさへ考へられてゐた。戰場に於ける重要諸施設に對する防空は　おほむね第十章に述ぶる國土防空の要項に準じて行はれるから、こゝでの細說はさけるが、特に着意すべきは重點に徹底して防空處置を講ずることと、思ひきつた分散、僞裝を實施することである。

第七節　國土防空

飛行機の最近に於ける顯著なる發達特に行動半徑、對地攻擊威力の增加は、たとへ彼我兩國土が遠隔の場合に於ても大擧襲來し、瞬時にその國の政治、經濟の中樞及び軍事資源に對し徹底的打擊を與へることが可能となつたため、國土防空準備を平素より遺憾なからしめ、若し空襲を蒙る場合に於ても、國民は不撓不屈毅然として慘烈なる戰爭の遂行に堪へ、戰爭目的の貫徹を期さなければならぬ。

國土防空はこれを間接防空、直接防空に二大別し、後者を更に積極的防空と消極的防空とに區分する。

一　間接防空

我が航空兵力を以て敵航空兵力を擊滅し或は陸海軍を以て敵航空基地を攻擊、これを我が國に對する空襲可能距離外に後退せしめ、敵空襲の根源を斷つもので、國土防空の理想的形態ではあるが、航空作戰の特質上直ちにこれを以て國土防空の完璧を期することは出來ない。大東亞戰爭當初に於てハワイ、フィリッピンを空襲し、敵空中勢力に多大の損害を與へた空中決戰並びに時々支那奥地に進攻して敵飛行機を擊碎し、或は飛行場を爆擊してその使用を不可能ならしめつゝある作戰は、一面この間接防空とも謂へるのである。

二　直接防空

官民一致の統制ある訓練に基礎をおき、これに必要なる防空施設並びに資材を整備し直接國土を防空するものである。

1、積極的防空

防空飛行隊、高射砲隊、高射機關銃隊、防空氣球等を以て敵機を擊墜又は驅逐し、已むを得ざるもその行動を妨碍し、或は空襲企圖を斷念せしめて防空の目的を達成するもので、主として戰鬪機よりなる防空飛行隊は防空監視哨、又は哨戒機等の報告により根據飛行場を離陸、待機地帶に上昇待機し、敵機を認むるやこれを攻擊、擊墜するを任とし、夜間は聽音機の補助により活動する照空隊の協力を必要とする。又高射砲隊は豫め主要箇所に配置せられ射擊により晝夜を問はず敵機の擊墜、驅逐に任じ、防空飛行隊と相俟つて積極防空の主體をなすものである。高射機關銃隊は、主として高射砲陣地帶の內方に在つて重要施設の直接掩護、又は高射砲の射擊困難なる低空の射擊を主務とし、防空氣球隊は敵機來襲の公算大なる航路に氣球を昇騰せしめ、敵機をこれに衝突墜落せしめ、或は敵に精神的恐怖の念を起さしめてその飛行を制限又は大高度を採らしめ、爆擊實施を困難ならしめるのを目的としてゐる。

2、消極的防空

重要施設の遮蔽、擬裝、燈火管制等の手段により敵機による發見を困難にし、要地に對する敵機の來襲を避け、敵機の爆擊を受けるに當つては、徹底せる國民の訓練により、防火、防毒に最大の能率を發揮し、避難、救護等により危害の防止と被害の輕減をはかる外、施設の分散により敵彈の效力を制限する。これは通常官民自體の組織がこれに當るのである。

その他防空監視、防空通信、防空警報等、敵機の發見、報告、通報は防空活動の基礎をなし、その設備及び活動の適否は防空の成否に重大な關係を持つものである。

敵機發見のためには近時各國共に無線による方向探知機を使用し、その進歩は顯著なものがある。

三　主要都市の防空對策

1、都市人口の分散

敵國主要都市並びに工業基地の爆擊は、近代空軍戰略の目標であり、人口の都市集中は國土防空上最も危險にして、その戒むべき最大事である。よつて國土防空對策の完璧を期するためには、都市人口の分散は最大の急務である。元來都市人口膨脹は自由主義文明、資本主義の發展の結果、農業と商工業、農村と都市との對立を激化し、遂に農村の全面的敗退の下

に、都市人口の急激なる增加となつたものであり、都市の大膨脹は不健全な文明による國家の重患の現れである。この意味に於ても、都市人口の分散は今日世人の常識となつた國防國家建設上の最大事であると言はねばならぬ。

2、精密工業の地方分散

機械工業は蒸氣機關の發達によつて生れた。そして蒸氣機關による時代は、工場その他の附屬施設も一ヶ所に集中せねばならなかつたが、今日の內燃機關による時代に於ては、最早工場の一切の施設を一ヶ所に集中せねばならぬと云ふことは解消した。そして電力の使用し得る處山中でよし、僻村でよし、いづれの地に於ても可能な時代となつた。よつて都市集中の精密工業を全農村に分散し、空爆の危險よりこれを解消する一方、農工の對立を根本的に解決する農工一體政策により、全工業勞働者は農民的生活の下に於て、その健全なる心身より絕大なる能力を擧げ、以て世界無比の精密工業を建設すべきである。

3、大學、高等專門學校の地方移轉

學生生徒は腐敗した都市文明の中で、剛健な心身の發達を妨げられてゐることは論を待たない。よつて學校制度の根本的改革は別問題として、先づ中等學校以上の學校、卽ち高等學校、法文科系統の全大學、專門學校及び豫科は主要都市よりこれを移轉せしめ、環境良好なる地方農村又は山野の耕作不適當の地を選んで、極力學生の手によつて構築すべきである。（例へば加藤完治氏の日輪兵舍風のもの）

4、行政簡素化による人員の整理

行政の簡素化により人員を整理する。卽ち主要都市の官廳を大整理することにより主要都市人口の減少をはかる。

5、恩給生活者の地方分散

主要都市附近に止まつて空襲の危險にさらされてゐる恩給生活者が、各〻その出身町村に歸るならば、新鮮なる食糧によつて健康となるばかりでなく、地方自治に貢獻するところ極めて大である。恩給生活者の都市に止まる理由の一つに子弟の敎育が擧げられるが、學校の地方分散はこの理由を消滅する。

6、市街の大改築

かくして主要都市に殘置すべき人口を檢討し、それに必要な程度の家屋を殘して他はこれを解體する。殘置家屋は防火の見地を第一義として幾多の集團とし、その間の地區は畑地又

は植林し、市民所要の野菜は自ら耕作させる。

第九章　特種作戰

作戰の一般的原則については、既に前章に於て概說したが、次に皇軍が現に直面してゐる特種作戰、既ち上陸作戰、極寒地及び熱地の作戰、支那に於て戰はれてゐる各種小戰について、その特質的事項を說述する。

第一節　上陸作戰

上陸作戰は輸送船又は舟艇を以て海洋を越えて行はれる作戰であつて、その特長とするところは、陸海空軍の緊密なる協同作戰であることである。即ち、內地又は作戰根據地を出航した船團は、海軍及び空軍の掩護の下に、敵地に向かつて進航し、敵の抵抗を破摧して、所望の地點に上陸しなければならない。故に上陸作戰實施に伴なふ困難性は、

1、船團の航行間に於て、敵航空機及び潛水艦の攻擊を受け易いこと。

2、上陸に際し、敵の準備した正面に向かふ場合に於ては、極めて不利な戰鬪を交へなければならないこと。

輸送船から上陸海岸までの間は、全く敵砲火に暴露するばかりでなく、我が兵力は逐次海岸に到着し、この間主力の急速な增援は望み得ない。更に又、我が砲兵の協力も十分に出來ない。

3、上陸地點に未だ確乎たる地歩を占めない時機、特に主力の上陸未完了の時機に、敵の大規模の反擊を受け易いこと。

4、上陸完了後に於ても、後方補給線は敵のため常に脅威せられ、戰力を消耗し易いこと。

等である。

これらの困難性を排除して、上陸作戰を敢行せんがためには、制空、制海權を絕對に確保すると共に、努めて敵の意表に出て、敵の準備しない地點と時機に於てこれを敢行することが必要である。

古來、上陸作戰を試みた戰例は決して少くないが、制海權のない場合に於ては常に失敗に歸してゐる。ナポレオンは埃及遠征に當り、一時巧みにネルソン艦隊の目を眩して、アレキサンドリアに上陸したが、上陸後に於て、その艦隊はアブキールで潰滅せられ、埃及作戰失敗の因をなした。ナポレオン畢生の事業であつた英國の屈伏も、僅か十里に充たぬドーヴァ海峽の制海權を得ることが出來なかつたために放棄せねばならなかつたのである。

日清、日露戰爭に於ける、皇軍の遼東半島に對する上陸作戰は、黃海の海戰及び仁川、旅順沖の海戰によつて得られた制海權の下に實行せられたものであつた。しかも敵の作戰上の過失に乘じたため、大なる抵抗をうくることなく行はれたのである。

近時航空機の發達は、その行動半徑を著しく增大したばかりでなく、その艦船に對する攻擊威力も亦極めて强力となつた結果、武裝、裝甲弱く、速力遲き輸送船團は、敵航空機の好餌となり、こゝに制海權のみならず制空權を獲得しない海上機動は、不可能視されるに至つた。

次に上陸作戰に於て着意すべきことは、敵の意表に出て、その抵抗及び反擊の機會を與へぬことである。戰史に見るのに、準備した敵の正面に對して行はれた强行上陸は、成功極めて困難なことを教へてゐる。

第一次歐洲大戰に於て、英佛聯合軍によつて試みられたガリポリの上陸作戰は、攻略上の目的により、土耳古の要塞（舊式要塞ではあつたが戰爭加入前急速に防備を改新した）前面に對して强行せられたが、頑强なる土耳古軍の抵抗に會し、交戰一周年に及び僅かに半島の二據點を占領したゞけにとゞまり、實に十一萬の損耗を出して作戰は失敗に終つてゐるのである。

第二次歐洲大戰に於て、獨軍は英國海軍により全く制海權を抑へられてゐるエーゲ海峽を越えて、クレター島に對し、グライダーを以て空中より奇襲的に上陸を敢行し、偉大なる成果を收めた。これは特異な上陸戰法の一例であるが、潛水艦、航空機の發達に伴なひ空中よりする兵團の上陸作戰を示唆するものである。

今次大東亞戰に於て、皇軍は開戰劈頭マライ、フィリッピンに上陸を敢行し、陸海緊密なる協同の下、よく企圖を祕匿して奇襲的上陸に成功した。のみならず制空、制海權の絶對的把握により、その損害を極めて僅少ならしめることが出來たのである。

上陸成功の後に於て、戰果を擴張し、占領地を獲保せんがためには、後方補給線の確保を絶對に必要とする。

これがためには航空基地の迅速なる推進と共に、船團の掩護には特に留意せられなければならない。

四面環海、しかも南太平洋に點在する諸島嶼に對し作戰する皇軍にとつては、上陸作戰はお家藝とも稱すべきものであるが、その反面、上陸作戰最大の敵である飛行機及び潛水艦は、敵米國の厖大なる生産力によつて逐日增强せられ、戰爭は今やお互に背後交通線を覘ふ消耗戰爭の形相を呈してゐる。

國民はこの上陸作戰の特質を深く認識し、船舶、人員、資材等の消耗を覺悟して、生産の增强に挺進せねばならない。

第二節　極寒地及び熱地作戰

極寒地及び熱地作戰は、戰鬪一般の原則には變化ないが、如何にして極寒地及び熱地に於ける特有の氣象、地形、地物等を克服利用すべきか。如何にして極寒、酷熱、凍傷、惡疫等に對し、兵力の減耗を防止すべきか等の諸件に對して、深厚なる熟慮と、十分なる施設を必

要とするところにその特異性が存する。卽ち、作戰軍は所謂敵の外に　極寒、極熱、凍傷、惡疫等の、常續不斷の脅威を受けてゐるのである。この常續不斷の脅威は、極めて仕末に惡い攻擊であるのみならず、この戰力たる極寒、酷熱、凍傷、惡疫等は、永續的、普遍的、浸透的效力をもつ。これは軍の生存に對する重大な脅威である。この攻擊は、我が受けると同時に、敵も亦受けるのであるから、戰略戰術運用の妙も又こゝに存する。古來我が國は領域狹長であつて、亞寒帶より亞熱帶に亙るのであるが、その大部分は寒暖宜しきを得た極樂鄉である。この溫暖なる地方に生育訓練せられたる國軍が、如何に熱地及び極寒地作戰に耐ゆるかは、平時相當心配せられたところであるが、南方大東亞戰域の赫々たる武勳を見るにつけても、軍當局の平戰兩時に亙る、周到なる計畫準備と訓練の精到さは、全く驚嘆の外はない。

一　極寒地作戰

極寒地作戰の戰術的特異性はおほむね左の如くである。

1、地形は一變する

土地は凍結して堀開困難となり、四面氷雪に覆はれて雪原と化する。又河川湖沼は水運を絕ち、陸上交通が出來るやうになる。道路は路外の行動を許すが、案內者を附さなければ方向を失ひ易く、又住民地は寒さを凌ぎ、軍の生存を全うする重要なる要地となる。山地は益〻運動の困難性を增大し、障碍の程度は略〻絕對的のものとなつて來る。

2、人馬は馬鹿になり、且つ下手をすると凍傷にかゝる

寒氣の人體に及ぼす影響は、その人の習慣體質により大いに異なるのであるが、一般にものを考へることは勿論、ものを言ふのも億劫になる。隨つて企圖心がなくなつて、なりゆきにまかせ勝ちになり、命令の不徹底、連絡の不確實を來して來る　大體零下二十度內外では鬚髯が凍りつき、零下三十度內外では眉睫が凍り、眼の開閉に異樣な感じがし　零下四十度內外になると、峻烈な寒氣が全身を襲ひ、頭上より壓縮せらるゝやうな感じがして、野外の睡眠は勿論、長時間の停止も困難となるものである。これに風が加はつて來ると大變で、風に對向して顏も向けられない許りでなく、射擊も大變困難になる（風向の利用は戰術的に重大な問題である）。人間がこの寒さを凌ぐために、如何なる防寒裝備及び施設が必要であるか、これを着て歩くことが如何に困難であるかは想像されたい。橇、スキーの利用等は絕對に必要である。馬は人間に比して耐寒力は非常に强いが疲勞し易くなる。防寒のための個人裝備はもとより、軍の生存のためにも實に厖大な防寒設備を必要とするのである。

3、兵器、器材はその機能を發揮しにくい

人間が重い防寒服を着てゐるために、兵器、器材の操作が非常に困難となる許りでなく、脂油類、蠟劑等が凍結してその機能を發揮しないやうになる。その顯著な一例を擧げると、特種の油を使はなければ、零下二十五度内外となると機關銃は擊發不能となり、又機關が凍結するために故障が非常に多くなる。程度の差こそあれ、これは砲兵にも、戰車にも、通信器材にも、飛行機にも共通なことである。

4、軍隊の行動が極めて鈍重となる。即ち行軍及び戰鬪動作そのものが極めて困難である。

以上の説明でこの項の理由は判つたと思ふ。日本内地で冬の寒い日、夏の着物を着て、寒さだけを我慢して仕事をし、それで極寒地の作戰の鈍重性などを思ひ起しては大變なことである。

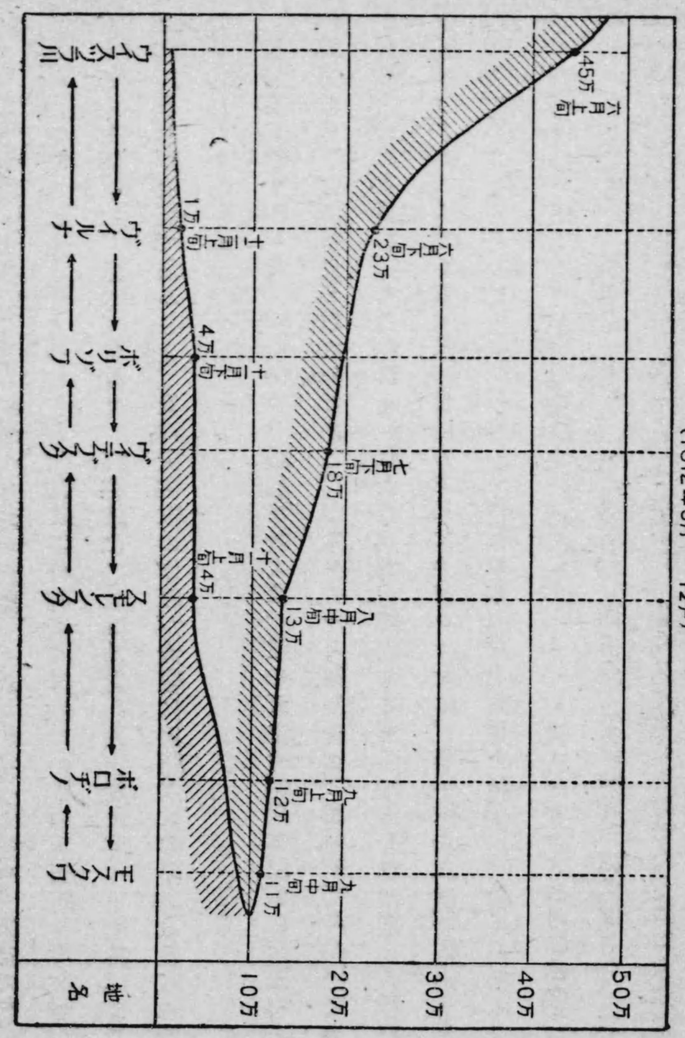
今までの説明で、

（イ）極寒によつて軍の生存そのもののために、如何に厖大な裝備が必要であり、而もこれを常續的に毎日補給することが、極めて困難であつて、而も緊要缺くべからざるものであるかと言ふこと。

（ロ）防寒裝備の重壓、宿營、給養、給水の困難。これらに基づく行李、輜重の增大等と、その他前四項の理由とによつて、如何に軍隊の戰術的行動そのものも困難なものであるかと言ふことを理解し、隨つて自然に、極寒地に於ては前述した着意に基づいた特異なる編成、裝備、戰法が必要であること、及び大部隊の作戰が大變に困難なものであると言ふことが了得せられたことと思ふ。

彼の有名なナポレオンのモスクワ遠征に於ては、彼の天才的頭腦を以てした周到なる冬季作戰準備の下に決行せられたのである。即ちロシヤと開戰せば、廣漠不毛の戰場に於て、攻勢作戰を行はなければならぬから、强大な兵力を整備すると共に、これに對する給養を準備することが必要であつた。この目的のためにナポレオンは、毎年徵兵人員が從來八萬であつたのを一八一一年から十二萬に增加し、作戰地方の歷史地理を調査し、過去のポーランド及びロシヤに於ける戰役の經驗を蒐集し、一八〇六、七年のポーランドに於ける作戰の經驗に基づき、各軍團をして國境を超ゆる際、各自携行四日分、軍隊糧秣車積載四日分、軍團輜重十六日分の糧秣を携行するを目途として準備し、且つワイクゼル河畔の各地に大倉庫及びパン製造所を設備し、バルチック海及びニーメン河の水路輸送を準備し、且つデュナ河利用の

ナポレオン兵力漸減圖
(1812年6月——12月)



ため、リガを速かに奪取するやうに攻城を準備する等、約二年に亙り周到な諸準備を整へた許りでなく、軍の有する數十萬頭の牛馬の糧秣のために、牧草生長し、所在にこれを求むることの出來る時期に開戰したのである。かくの如き雄大周到な準備の下に行はれたのであるが、當初ニーメン河を出發せる四十五萬の大軍は、主として極寒と給養の粗惡により、同地歸還時にはおほむね二千四百に減耗してゐた。この兵力減耗の狀態を表示すると前頁の如くなる。

以て如何に極寒地作戰の困難性と、極寒の常續不斷の攻擊が軍の生存に如何に大なる脅威を與ふるかゞ分る。然らば吾人は如何にこの極寒地作戰に對處すべきであらうか。獨蘇戰第一年に於ては、蘇軍は冬將軍の到來によつて、漸く第一年の獨の鋭鋒を支ふることが出來たのであるが、第二年の冬將軍到來と共に、彼等はこれを逆用して果然大兵團を以てする攻勢作戰を敢行し、赫々たる戰果を收めてゐるのである。古は戰鬪は晝に行ひ夜は大體休むものと考へられてゐたのであるが、戰鬪時間の持久化に伴なひ、晝夜の別なく戰鬪は繼續せらるるやうになり、更に一歩進んで軍隊の訓練によつて、夜間の害を除き、敵の意表に出る戰法の一つと進展しつゝあるのである。大膽に極言すれば、溫暖は晝であり、極寒は夜である。戰鬪の急速なる終結の必要性卽ち、戰鬪行動の連續繼續の必要性は、晝夜と同樣に極寒溫暖

の區別をも超越しつゝあるかの如く觀察せられるのである。……そのやり方は強大な空軍及び機甲によるものであらうが……。

註　極く最近までは、軍隊は冬營と稱して、冬になると戰鬪を止めて休宿の狀態に入り、この間を利用して教育、訓練、整備、改變等をやつたものである。

國軍は既に北滿に常駐してゐる許りでなく、大正年間にはシベリヤ出兵の貴重な經驗を有するのであるから、極寒地作戰の特性に應ずる特異なる編制、裝備、戰法の研究、整備と軍隊の訓練は十分に行はれてゐると思ふのであるが、我等銃後國民としては、極寒地作戰に應ずる精强な軍錬成の基礎として、先づ自らの體力、氣力の向上をはからなくてはならぬ。

「寒さ」に馴れることがその根本である。冬季作戰に關し、蘇軍が獨軍に勝る如く稱せらるるのも、その根本的素因は、國民が常續的に寒さの訓練を受けてゐたからに相異ない。薄着の勵行、ストーヴ廢止、寒稽古の敢行等、吾人の直ちに實行すべきものの多くが、我が日常生活にあることを知らねばならぬ。

二　熱地作戰

熱地とは大體どんな所であるか。熱帶とは南北同溫線の間に横たはる地帶であつて、年中溫度の差少く、四季の別なく、最寒冷の季節に於て（猶華氏六十八度位の平均溫度を示し（……太陽に對する地軸傾斜度の影響を受くること甚だ少いからである）、又濕氣多く、日光の直射熱は最高百四十度に達し、休止なき野外一、二時間の勞作は、熱帶に慣熟しない者に取つては、人體の生理作用の極限まで達する。然しスコールの襲來は、暑氣を排ひ、一抹の凉氣を與へる。又赤道に近い所では一年に乾季と濕季がある。濕季に入ると、雨量が頓に增加して豪雨が盛んに降り、防水具も、天幕も、身體の濕潤を防ぐことは出來ない。而も濕潤なる氣象は、日光の直射炎熱よりも更に身體の生理機關を害し、多數の兵員を損傷するは、乾季よりも寧ろ大である。又この炎熱は、動植物の繁茂及び惡疫の流行には最適である。ジャングル、マラリヤ等はその顯著な所產である。故に熱地作戰の强敵は、

イ、特異の氣象、卽ち濕度大なる酷熱

ロ、熱地特有の動植物繁生する未開地（ジャングル、猛獸、毒蛇）

ハ、各種の惡疫等

これである。

この諸要素が、極寒地作戰と同樣に、軍の生存及び軍の戰術的行動に重大なる影響を與ふ

るのである。極寒地作戰に於ては、特別な編成、裝備、戰法、訓練が必要であると言つたが、熱地作戰に於てもこれと同樣に、獨得な編成、裝備、戰法、訓練が必要である。以下こゝでは熱地作戰に特に顧慮すべき衞生及び給水についての概說に止むることとする。

1、衞　生

熱地作戰に於ける衞生業務は、戰鬪間に於ては素より、行軍又は駐軍間に於ても極めて重要である。熱帶地に於ては、直接戰鬪より生ずべき傷よりも、寧ろ行軍駐軍間に發生する患者の方が多いからである。隨つて衞生に關する裝備をよくすると言ふことは、勿論必要ではあるが、同時に各級幹部否全員が、衞生兵たり、軍醫たるべきであつて、衞生に關する識能を備へて、普通一般の熱帶病であるところの喝病、チフス、マラリヤ、コレラ、赤痢等の徵候を熟知し、速かに發見し、速かに處置する如くならなければならない。英軍のメソポタミヤ作戰に於て、一九一五年二月初までに、戰場に送つた兵力は二萬人であつたが、これに對して、一班二百名を收容し得る衞生隊五個、千名を收容し得る野戰病院一個、二百五十名を收容し得る兵站病院二個半、六百名を收容し得る兵站病院六個の衞生機關を準備して作戰を實施してゐるのである。

2、給水（特に沙漠地作戰に於て緊要である）

極寒地に人を放置すれば凍え死ぬ。熱地に人を放置するも燒け死なない。然し水を絕てばすぐ參る。而も熱帶地に於ては適當なる飲料水を得ることは非常に困難なるを一般とする。沙漠地に於て、時に然りである。都會地に於ては、水道の設備があるけれども、土人は多く河水又は水を利用する。然し河水は通常濁水である許りでなく、糞尿を河水に流すから、傳染病の傳播は想ふだに戰慄を感ずる。人類生存上、水の絕對不可缺なのは論を要しないが、熱地作戰に於ては、水を輕視しては作戰遂行は勿論、軍の生存そのものが全く不可能と言つてよい。この苦しみを知るものにとつては最近のニュース映畫に於て、ヤシの水を貪り飲む皇軍勇士の姿が、ドウッと湧く笑聲とともに觀賞せられるのを見て、全く涙なきを得ないではないか。且つ惡水は惡疫流行の根源である　卽ち給水裝備に對する深厚な考慮を必要とする次第である。

これより水の追送を主として行はれた英軍のパレスタイン攻略を概觀しよう。埃及遠征軍は、パレスタイン地方攻略のため、無水地帶たるシナイ半島を通過せねばならなかつた。それで英軍はパレスタイン攻略の準備として、給水上の根本計畫を立案し、水槽列車並びに水

道管を以て、兵站主線に沿うて追送し、これよりラクダ隊を使用して各隊に分配しようとした。水道管に依る追送量は、乘馬一師團、歩兵二師團分約五十萬ガロン（一萬二千五百石）の追送を必要とした。これがために英軍は、ナイル河の河水を淨水し、水道管を以てスエズ運河河底を通じ、同運河東岸「カンタラ」に送り、爾後「ガザ」に至る間、軍の前進に伴なひ水道管を延伸して、第一線に追隨せしめ、この區間を四區に別ち、各區間にポンプを備へ、各地區に備へたる貯水タンクに逐次中繼送水した。かくの如き厖大なる給水設備を以て本作戰は敢行せられたのである。パレスタイン遠征軍司令官アレンビー將軍は、その報告に於て、馬匹は三、四十時間は一滴の水なくも生存し得るが、人は一日最小限一ガロン（二升五合）を必要とすと言つてゐる。かくして、我等は熱地作戰には、給水裝備、設備の必要性を知ると共に、全面的軍機械化と、强大な航空軍の必要性を痛感する次第である。目下行はれつゝある南方熱地作戰が如何なるものであるかは、新聞紙上の記事を以て明らかである。既に讀者は相當なる戰術家であるから、極寒極熱が戰略戰術に及ぼす具體的な原則については詳說を避ける。

第三節　小戰並びに遊擊戰

一　小戰

小戰とは、戰場の後方若しくは側方に於て、主力軍の決戰を間接的に有利ならしめることを目的として行はれる戰鬪であつて、通常小部隊を以て獨立的に行はれるものである。

小戰の主なる方法としては左の如きものがある。

1、主要交通線の破壞

日露戰爭に於て長沼挺進隊、長谷川挺進隊が遠く露軍背後に進出し、新開河橋梁の破壞、長春北方張家灣停車場附近の鐵道電信の破壞を敢行したのはその一例であつて、その結果は露軍をして、有力なる兵力を後方警備のためにさかしめ、奉天會戰戰勝の一素因となつたのである。

2、戰場後方に於ける重要諸施設の破壞、燒盡

日露戰爭に於て、ミシチェンコ騎兵團は、我が兵站の重要なる基地であつた牛莊に向かひ

挺進攻擊を企てた。當時、牛莊附近に於ける我が警備は極めて薄弱であつたので、一時は滿洲軍司令部に於ても非常に心痛したのである。

幸にしてミシチェンコ騎兵團の行動は適切でなく、我が兵站守備隊の善戰健鬪によつて、克くこれを擊退することが出來た。

3、敵輸送隊の攻擊

輸送隊はその自衞力が薄弱であるのを通常とするのみならず、その素質も第一線部隊に比較して劣るのを通常とする、故にこの種の戰鬪に於ては、しば〳〵敵輸送隊を奇襲して敵の補給線を脅威しようとする方法が採用せられる。

而してこれらの戰鬪を通じ、行動上特異とする點を述ぶれば、

（イ）極力企圖を祕匿して、深く敵地に侵入すること。

これがため部隊の編成裝備に於て、長期日の困難なる行動に耐へうるやうに工夫すると共に、夜暗を利用し、人跡未踏の地を踏破し、機敏、放膽なる行動をとり得ることが絶對に必要である。

（ロ）努めて敵の弱點を覘ひ、奇襲的に攻擊を加へること。

この種任務に服する兵力は元來極めて少く、又その裝備も決して優良ではない。故に正正堂々の戰鬪を交ふることはその本旨とするところではないのであつて、あくまでも奇襲的に敵の弱點を覘ひ、戰果の大なるを期するのが必要である。

（ハ）決戰を避け、敵の眞面目な反擊を受けた場合には巧みに離脱逃避し、再び戰期を伺ふ。

これを要するに、小戰は有能なる指揮官の下に於て、小數精鋭の兵力を以て、果敢放膽に行動するとき始めてその目的を達成することが出來るのであつて、その效果は直接的ではないけれども、敵軍隊、特に高級指揮官の心理に重大なる精神的脅威を與へ、或は主決戰方面に充當すべき兵力を後方にさかしめ、或は敵の補給、通信連絡を阻害して、敵戰力の低下を計る等の目的を達成することが出來るのである。

二　遊擊戰

小戰と同じやうに、敵の背後に行動して、敵戰力の消耗、治安の擾亂をはからうとするものに遊擊戰がある。これが小戰と異なる點は、主として不正規軍（民衆の武裝化されたるもの）によつて常續不斷に戰はれる點である。

遊擊戰の起原は明らかではないが、近世に於てその偉大なる效果を證明したものに、ナポ

レオンに對する西班牙及びロシヤの遊擊戰を擧げることが出來る。クラウゼヴィッツは、民衆武裝なる標題の下に、この戰鬪法を說明して左の如く述べてゐる。

『歐羅巴に於て國民戰爭の誕生を見たのは、實に第十九世紀、卽ち佛蘭西革命であつた。然しながら、當時に於てはなほ國民戰爭に對して、是非の議論があつた。

或る者は、民衆武裝は社會革命に導く一手段で、國內の治安維持に危險を齎すものであると論じ、或る者は精兵主義の立場から、民衆武裝はかへつて國民戰力の低下を來たすものであると論じた。

然しながらナポレオン戰爭の結果は、これらの杞憂を覆し、民衆武裝の效果を歐羅巴全國民に敎へた。

卽ち民衆武裝の效果は、一八〇八年に於ける西班牙戰役が先づこれを實證した。ナポレオンの武略、外交的手腕を以てしても、遂に西班牙に於ける民衆軍の蜂起を掃滅することが出來ず、この背後の不安が遂に彼をしてモスクワ遠征に失敗せしめ、帝王の地位より失脚せし素因をなしたのである』と。

遊擊戰に於ける戰鬪の指導法は、おほむね小戰に於ける場合と同樣であるが、遊擊戰は通常自國內に於て行はれるが故に、民衆の獲得、利用、これが武裝蜂起については、特に着意して工作が行はれる。

蔣介石は支那事變開始以來武漢三鎭戰に至るまでの二年間の正規戰に失敗したため、その後は正規戰を回避して遊擊戰を主體とする作戰に轉換した。昭和十八年八月蔣介石は遊擊訓練班と稱する一種の士官學校を設け、自ら主任となつて遊擊戰法を指導する幹部養成に從事した。この幹部敎育の標語に、『遊擊戰は正規戰よりも重し』と言つてゐる處より見ても、遊擊戰に如何に重點を置いてゐるかゞ知られる。

この蔣介石軍の戰術敎程には、遊擊戰法について次の如く述べてゐる。

遊擊戰術とは一言にして言へば、『敵進めば我退き、敵退けば我進出、敵が怯めばこれが攪亂を圖る』戰術であると。

そしてこれが具體的戰鬪方法としては次の如き戰術を採用してゐる。

1、化　整　爲　零

遊擊隊が若し敵軍によつて包圍され脫出の方法がない場合に、自己の生存と、實力の保全のため分散する戰術である。但し、この場合には二ケの條件を具備してゐなければならぬ。

第一は現地に分散と隱蔽に便利な叢山峻嶺が必要であること。第二には民衆の中に分散潛在する必要があるため、遊擊隊に對し熱烈な同情を寄せ、これを擁護する多數の民衆を必要とすることである。

2、化　零　爲　整

遊擊隊は分散した小單位の兵力であるから、却つて敵軍のために擊破せられるか、部分的敗滅の危險を蒙ることがある。かゝる情勢の下に在つては、迅速に遊擊隊の全兵力量を集中し、敵軍に對し正面から襲擊を加へ一擧にこれを擊滅するを良策とする。卽ち化零爲整とはこの集中戰術である。この際萬一敵軍が一ヶ所に兵力を集中してゐるため、遊擊隊がその兵力を集中しても敵軍を潰滅せしむる可能性がない場合は、遊擊隊は敵軍を分散せしむる戰術を採らねばならぬ。卽ち現地の狀況により遊擊隊を若干の單位に分けて、敵軍の糧秣集積所に襲擊を加へ、或は敵軍の固守せねばならぬ重要都市を陽攻し、或は敵軍の交通要點を攻擊し、或は敵要人を狙擊し、その家屋を破壞し、又は謠言を散布して强度の恐怖狀態に立入らしめ、敵兵力を分散せしめねばならぬ。かくして遊擊隊は敵の兵力分散を知るや、直ちに全部隊を集中して敵軍の最も虛弱な一點を選擇し、全力を以て敵を包圍攻擊し、一擧にこれを粉碎せしめるのである。

3、旋　磨　打　圍

遊擊隊は或る時は敵軍の正面に向かひ巧妙なる攻擊を加へ、又或る時は敵軍の後方に廻りこれに大衝擊を加へ、更に又突然敵軍の側面に廻り敵を奇襲するのである。卽ち旋回戰術である。かくして敵軍をして周章狼狽、恐怖心を起さしめ、遊擊隊の戰術運用を不明ならしめる。かうすれば敵軍に重大なる打擊を與へることが出來、時としては敵軍をして、遊擊隊が主力軍よりも優勢であるかの如く思はしめることが出來る。この際遊擊隊は地理をよく知り、人員少數なる故行動迅速で、更に民衆の擁護と同情を得る特徵があるから直ちにその足跡を晦ますことが出來る。突然遊擊隊に襲擊された敵は、直ちにこれに應戰する術なく搜索部隊を派遣しても徒勞に終り集合する。その時遊擊隊は又現はれて或は襲擊し、或は突貫し、敵をして周章狼狽、その應戰を困難ならしめる。

4、聲　東　擊　西

これは一種の虛勢の方法を以て潛行的に前進する行軍策である。例せば東西に二城ありと假定し、我が攻擊の目標は東城とする。この場合攻擊に先立ち虛勢を張つて西城を攻擊する

と宣傳する。同時に大部隊を西城に向かつて進め、途中にして少數部隊のみを西城に進ませ、主力の大部隊は東城に廻り、晝は伏し、夜行し、迅速敏捷の行軍を以て東城を攻擊すれば必ず勝利を得る。このやうに敵軍の注意を我が假裝攻擊目標の上に牽制し、眞の攻擊目標の地方に對して注意と警戒を欠く時に乘じて、速かに力量を集中して(旗、ラッパを用ひず)敵に突擊すれば必ず勝利を得られる。

5、麻雀戰術

この主要なる意義は敵軍を攪亂し疲勞せしめるのである。部隊は十人を以て一群とするを最適とし、武器は步兵銃以外に輕機關銃一班を具へるを最上とする。各部隊は前以て各村落、森林、要塞地その他敵軍が必ず通過する地點に伏在せしめ、隨時隨所敵軍に猛烈な襲擊を加へる。一群を以て單位とするから潛伏し易く、敵をして發見に困難ならしめる。從つてこの戰術は敵軍を襲擊する機會非常に多く、巧みに運用すれば莫大な效果が齎される。これを實行するには部隊內の組織分子に注意をし、民衆の背叛者を防ぎ、農民に危害を與へぬやうにせねばならぬ。從つて優秀分子を選擇してこれに充當せねばならぬ。この分子は軍事上の常識、政治上の知識もあり、愛國愛民の觀念の强いものでなければならぬ。

6、遊擊隊の組織

遊擊隊組織の第一條件は必ず現地の者を用うること、これは地理を熟知することが戰術上の價値大であるからである。第二の條件は優秀なる軍事技術と健全な民族思想と献身的奮鬪精神の持主であらねばならぬと云ふことである。

その組織系統は、第一種を大遊擊隊と云ひ、第二種を小遊擊隊と云ふ。

大遊擊隊は一團(一聯隊)を最大單位とし、三營(大隊)あり、營に三連(中隊)あり、一連は三班、一班は九人とす。團には機關銃と砲兵連を附屬せしめ、砲兵連には山砲、迫擊砲を備へ、衞生隊を有す。

小遊擊隊は一連を以て行動單位とする。連は三排(小隊)から成り、一排は三班とし、一班は九人とする。一班每に輕機關銃一挺を具へるを最適とする。

大小遊擊隊共に必ず政治指導員を設ける必要がある。この政治指導員の任務は一面に於て兵士の政治敎育の任に當り、兵に政治常識、民族觀念を與へ、一面に於て民衆を組織指導して遊擊隊と密接な聯絡を採らしめる。但し政治指導員は政治、軍事上の知識と民族觀念の持主で、忍耐克苦の犧牲的奮鬪精神がなければならぬ。

7、遊擊隊の任務

（イ）遊擊隊の第一の任務は、如何にして敵を襲擊するかの問題である。この問題に關して、遊擊隊は敵を襲擊する前に、第一に敵情を詳細に搜索し、正確な分析を加へて、豫定を立てる。第二は敵情を知るばかりでなく、敵軍の警戒情況と、敵軍の駐屯地帶の地形地物を部下に詳細に解釋する必要がある。第三は兵士を激勵するため、精神作興に關しても又注意せねばならぬ。かくして兵士は彈雨下と雖も恐れず怯まず勇敢に戰へるのである。

（ロ）對戰中敵軍の力量我より數倍も大きかつた場合は、遊擊隊は迅速に退却して戰に固執してはならぬ。退却時の行動は迅速に敏活に、隊伍は整然とせねばならぬ。そして敵が襲擊した場合には決して應戰してはならぬ。遊擊隊長は勝敗の如何を論じてはならぬ。

遊擊隊は豫め敵情を知り、敵軍が何時某地を經過するか、而してその場所は遊擊隊の待伏に適するや否やを調べて、敵軍の經過せざる前に待伏せし、敵軍をして疑惑を抱く餘地なからしめ、敵軍通過の時、密集部隊若しくは輜重部隊に向かひ突然猛擊を浴せかけ、敵軍に甚大なる損害を與へる。襲擊の任務が達成された場合は速かに退却するを至當とする。

（ハ）糧食は敵軍の生命線であるから、凡ゆる手段と機會に乘じて敵軍の糧食に徹底的破壞を加へるべきである。糧食が最も多く貯蓄されてゐる場所には大部隊が駐在してゐるから、通常糧食破壞は困難であるが、かゝる場合は兵士を化裝せしめて敵軍内に潛入せしめ、燒毀せしめる。

（ニ）敵軍の兵器工場や火藥庫等には必ず全力を以て襲擊を加へる。或時は技術に經驗ある兵士を派して敵線内部深く潛入せしめ、敵軍の銃器、砲彈の運搬に充當せしめ、機に乘じて敵軍の主要なる兵器工場や火藥庫に點火燒滅せしむ。但しこの任務を負へる兵士は、大膽愼重、萬難が目前にあらうとも目的達成までは死すとも止まざる精神を必要とする。

（ホ）遊擊隊の長距離行軍は、敵に發見されぬやうに晝伏夜行の方法を採るべきである。

（ヘ）遊擊隊長は如何なる場合に在つても確實に部下を引締めてゐなければならぬ。旣定計畫に基づき部下に適當の命令を下し、獨斷戰機を掴まねばならぬ。隊長は戰鬪中、彈雨下と雖も勇猛沈着に應戰し、部下をして仰いで泰山の如く尊敬せしめねばならぬ。

（ト）遊擊隊の第二の任務は敵情偵察である。卽ち、一、敵軍の兵數。二、敵軍の情勢（軍の歷史、敎育狀況、戰鬪力、上下の精神關係、糧食、兵士の生活意識、その他）。三、敵軍の主將（經歷、趣好）、幕僚。四、敵軍の行動。五、敵軍の宿營狀況（步哨の配備、現地民衆に

對する政策)、地形。六、敵軍の陣地配備。

偵察の種類は三種に分ち、第一は威力偵察(戰鬪中敵の威力不明の時には、その判斷のため少數部隊を向かはしめて攻擊を試みる)、第二は便衣偵察、第三は將校の偵察と兵士の偵察である。

(チ)第三の任務は徹底的に敵軍の交通(鐵道、自動車道路、步道、電線電話)の破壞。

(リ)第四の任務は漢奸の捕殺。

(ヌ)第五の任務は敵徵發隊の阻殺。

8、民衆の組織

遊擊戰術戰勝の因は廣大なる民衆の援助と合作にある。よつて遊擊隊は敵軍の襲擊以外に民衆を組織し訓練しなければならぬ。

9、民衆の武器

後備隊は少數の步兵銃を用うることが必要である。その他の大部分は土銃　獵銃、松樹砲及び梭標(以上は悉く支那舊式兵器、後標は手裏劍の一種)等を利用すべきである。

10、民衆の任務

一、遊擊隊の指導下に各種の作戰に參加せしめる。二、各種の警戒と步哨を放つて路上の人を探偵する。三、徹底的に敵軍後方の交通工作破壞。四、漢奸捕殺。五、敵軍の擾亂。六、輜重運輸工作。七、敵情偵察(例へば兒童をして敵軍に接近せしめ、謠言を撒布し、又は敵情を偵察する)。婦女隊の任務は敵情偵察、兵士慰勞、負傷兵看護、生產工作に參加する等である。

11、民衆と遊擊隊との關係

作戰の時に當つては各種民衆組織は須く遊擊隊の指揮に歸するが、平時に在つては民衆組織は一切凡て民衆の指導機關にて解決され、遊擊隊は唯側面的援助をなすに過ぎず、干涉することは出來ぬ。

12、上述の遊擊戰術を總括して一言すれば、遊擊戰術は全國總動員の一致的攻擊戰術であり、男女老幼を問はず、國民全體が護國の本能を自ら發揮することである。

クラウゼヴィッツは民衆武裝軍の用法について左のやうに述べてゐる。

1、武裝した民衆はやゝ戰場から離隔し、攻者の攻擊困難な州郡に烽起させ、その側邊を侵略させる。

2、兵力を一地に集結するよりも、分散烽起させ敵の攻擊を困難ならしめる。
3、正規軍の一部をして支援せしめるときは極めて强力なものとなる。
4、民衆武裝軍は勉めて決戰を避け、奇襲的戰法によつて敵を擾亂する。

以上クラウゼヴィッツの言は、ナポレオン戰爭の教訓として、遊擊戰法に對する彼の着想を述べたるものと見ることが出來よう。

而してこの遊擊戰法に對抗せんがためには、攻者は占領地民心の把握を第一義とし、戰爭の目的を明確にして、これを民衆に徹底し、所謂恩威竝び行ふことが極めて必要なのである。卽ち我に聖戰の目的が確立して居り、これが實踐に於て皇軍の行動眞に秋毫も犯すところのない限り、蔣介石をして乘ずべき釁隙を與ふることはないのである。

ふりかへつて獨蘇戰線を見るのに、蘇軍は盛んに祖國戰爭の名目の下に、國民の愛國的感情を鼓吹し、「パルチザン」戰法によつて、獨軍占領地區內の攪亂を圖り、その勇者に對しては「ソ聯英雄」の稱號を與ふる等、盛んに遊擊戰法による獨軍戰力の消耗を企圖してゐる。遊擊戰が思想謀略と平行して行はるゝ時、近代戰に於ても實に偉大なる力を發揮することは、深く考慮しなければならぬ點であらう。

結　語

戰術は進化し變遷する。以上述べ來つた近代戰術も、その原則に於ては不動のものもあるが、兵器の進步、社會狀勢の變化等に伴なひ、これに對應して千變萬化する。

今や世界をあげて戰爭の最中である。吾等又、大東亞戰爭の眞たゞ中に在り、世界人類は正にその全知能をしぼつて軍事技術と新戰術の攻究に空前の努力を拂ひ、その進步發達は日を追うて新たなものがある。故に吾等は、今日の戰法は更に明日に於ては飛躍的に變化することを豫想しつゝ、不斷に世界各國の軍事技術、兵器の進步發達、戰術の變遷等に油斷なく留意し、これに對應する戰術の攻究を怠らぬと同時に、更に進んで優秀なる新兵器の發明と必勝の戰術攻究に徹底的な努力をいたし、千變萬化の妙を發揮せねばならぬ。

然らば吾等の戰略戰術窮極の目標は何であらうか。石原莞爾中將によれば、

『皇祖の雄大なる御理想を、神武天皇は「八紘を掩ひて宇と爲す」と仰せられた。卽ち八紘一宇は數千年來、日本民族の世界觀であつた。我等はこの皇祖皇宗の宣示せられたる御理想

に絶對の恭順を捧げるものであつて、自ら世界觀を創造せんとするが如き考へは微塵もない。この古き、尊き、美しき世界觀は、近時國民の等しく口にするところであるが、西洋中毒の未だ醒め切れぬ現代人、特に知識人の多くは、内心八紘一宇に對する固き信念を持たざるものの如く、「人類のある間戰爭は絶えない」とは彼等の常識である。數十年後に近迫し來れる世界最終戰爭により、八紘一宇はいよ〳〵實現の第一歩に入ることを信ずる。我等は八紘一宇を單なる美しき觀念とは考へてゐない。正に我々の眼前に髣髴として望見する氣持がするのである』と述べ、

この無限の感激を『人類歴史の最大關節たる世界最終戰爭は數十年後に近迫し來れり』と喝破絶叫してゐる。そして更に、

『然らばかくの如き世界最終戰爭の來るべき軍事的條件は何であるか、最終戰爭は眞に徹底せる決戰々爭でなければならない。それがためには世界の一地方にある武力が世界中到るところに對して迅速果敢に決戰をし得なければならない。卽ちこれを可能にする決戰兵器の現出が決定的の條件である。吾人は「世界最終戰論」に論じてゐる通り、今日まで戰爭の大きい變化の逐次短縮して來て、今日から最終戰爭までの期間は既に三十年内外に近迫してゐるものと推斷してゐる（九頁の圖參照）。

僅か數十年後にかくの如き强大な決戰兵器が現出すると云ふことは、あまりにも早いやうに思はれるのであるが（これが今日までの常識であつた）、靜かに世界の大勢を考へれば、かくの如き突飛とさへ思はれることの現出は十分豫想しなければならぬ』と述べ、

吾等の、戰略戰術の窮極目標は、特に雄大なる皇祖の御理想たる八紘一宇顯現に向かつて、しかも數十年後に近迫し來れるそれに向かつて、猛進すべきことを明示してゐる。吾等日本人にとつて、かくも希望と光榮に滿ちた感激が又と他にあらうか。この光輝ある大目標に向かつて捧げ盡すことの出來る時代に生れたこの感激を以て、吾等は今次大東亞戰爭の完勝と最終戰に必勝の戰略戰術を獲得せねばならぬ。

編輯後記

石原莞爾中將が關東軍作戰主任參謀から、仙臺榴岡の歩兵第四聯隊長として着任したのは昭和八年八月であつた。滿洲事變に赫々たる武勳を建てた四聯隊の將兵は、石原聯隊長を迎へるやその士氣は正に冲天の慨があつた。

石原聯隊長着任と同時に、四聯隊の戰術は一變した。訓練第一主義となり、演習は實戰第一主義に變つた。內務班の整頓等は多少不行屆のことがあつても、營內にはいつも銃劍術や突擊訓練の張切つた掛聲がみなぎつてゐた。

將來戰に對する豫想と、これに對應して軍民の執るべき方策に關し、聯隊長の卓見に基づき聯隊の中堅將校は國防研究會を起し、その熱意の火の如き研究努力が、遂に昭和十年一月の鄕土別中隊制度となつて實施された。卽ち歩兵第四聯隊は宮城縣民の子弟の入營する處であり、宮城縣民の訓練道場である。故に中隊に於ける訓練、團結、革新はそのまゝ鄕土中堅青年の訓練であり、鄕土軍民團結、革新の基礎をなすものである。聯隊の鞏固なる革新行動

と團結は、宮城縣全般革新と軍民一體の實を發揮するに、最良の方策であるとの信念のもとに實施されたのであつた。

當時鄉土別中隊編制と共に、軍民一致、兵農一致、部隊內の革新のために幾多の運動が實施された。そして眞に一致團結した聯隊の目覺しい活動は、徹底して軍民一體の實を發揮し美はしい實を結んでゐる。今こゝにそれを詳述する紙數の餘裕を持たぬが、その大略を列記すれば、

○　軍民一體の運動として

一、軍旗尊崇の運動　當時軍旗尊崇の念欠如せる者多き縣民に對し、『四聯隊は宮城縣民の子弟の入營する處、よつて四聯隊に賜はられたる軍旗は宮城縣民に賜はられたるものなり』と軍旗中心に奉讃運動を展開した。その具體的實施事項は、(イ) 部隊內に於ては如何なる遠隔の處に在りても、軍旗に對する敬禮のラッパを聞かば直ちに嚴肅なる敬禮の實行。(ロ) 軍旗を奉持して部隊出動の場合、沿道地方民の敬禮實施。(ハ) 常時營內宿泊、見學團體に奉拜せしむ。(ニ) 軍旗祭當日、軍旗奉拜の縣下大學高等專門、男女中等學校學生生徒代表、國民學校幼稚園兒童、鄉軍分會員、男女青年團、婦人團體員等の整列、嚴肅なる敬禮、分列行進の實施。(ホ) 防諜上許可の範圍で摸擬戰を行ひ、民衆に近代戰を理解認識せしめ、特にこれには一般地方團體より救護班を參加せしめ、近代戰の性質と軍民一體で行はるべきことを確認せしむ。(ヘ) 軍旗祭當日の祝宴は參加者自費支辨、遺族、傷痍軍人、部隊に對する功勞者、師團々隊長は客分とした。

聯隊のこの運動に呼應して縣民自ら起した運動には (イ) 町村會が發起となつて軍旗奉讃會を興した。(ロ) 河北新報が主催となつて少國民の軍旗奉讃運動を展開し、軍旗祭當日は參加兒童の軍旗奉拜、劍道競技大會、軍旗に關する作文、習字、圖畫の展覽會、開催。參加校兒童の營內宿泊見學(女兒は外泊)。(ハ) 軍旗祭に代表的餘興奉納。

この運動の結果、軍旗を二階から眺めるやうな者や欠禮をする者がなくなり、榴岡聯隊の軍旗祭は軍民一體の盛大な祭となり、早くも昭和十年の祭日には奉拜者五萬人を突破するに至つた。

二、除隊みやげ廢止 (但し部隊內にて飼育のアンゴラ兎等を「みやげ」として分讓す)。

三、常時、鄉土訓練生徒その他團體の營內宿泊見學を許可、その都度鄉土中隊にて鄉友會を開催す。

四、良兵良民の育成を目指して、鄉土民衆の中堅たる兵の訓練は中隊長を中心として徹底せしめ、鄉土の有力指導者を招き鄉友會を開催、兵と共に會談協議せしめ、中隊の「家風」「傳統」を確立せしむ。

五、鄉土より中隊旗の寄贈。

六、中隊幹部の兵の家庭及び民情調査。

七、青年訓練、學校訓練の援助。

八、青訓主事教育の實施。

九、青訓の肅正。

一〇、鄉土訪問行軍演習の實施。

一一、劍術、射擊、體育競技會の實施。

一二、演習出張中地方民に迷惑をかけぬこと。

○　兵農一致のために採りたる實踐

一、農作物を荒すな（特に演習場附近の農民に對しては部隊の下肥、堆肥を與へた）。

二、隊内農事講習の實施。縣當局及び地方篤農家と連絡協力を求め、田畑作及び果樹園藝、農畜產加工、農村自治等全般に亙つて行ひ、營庭にはトマト、イチゴ、瓜、ヘチマ、キウリ、エン豆、サヽゲ、ナス等が見事に出來上つてゐた。又當時二百本の梅の植林を行つたが、それが今日では毎年數石の收穫が上り、梅干となつて軍旅の良き友となつてゐる。

三、玄米食の普及。

四、養兎（各中隊が競爭で行ひ、殊に馬小屋には可憐な兎がいつぱいであつた）。

五、滿洲農業移民への理解と奬勵（滿洲事情の紹介、移民地より幹部の歸省毎に招き兵と會談せしむ）。

○　部隊内に於ては、(イ) 月刊新聞「つゝぢが岡」の發行。(ロ) 私的制裁の根絶。(ハ)「ぶんまわし」の絶滅。(ハ) 將兵苦樂を共にし、殊に兵の浴場を日曜祭日は終日解放、その他は午後四時より消燈點呼時前まで解放。

○　戰術教育に於ては、前述の如く訓練第一主義であり、演習は實戰第一主義であり、演習場には犬の子一匹と雖も立入らせず。その勝敗は自然統裁によつて決すると云ふ方針であつた。そして『將來戰に於ては全國民各自が戰鬪指揮者でなければならぬ』との卓見のもとに「兵」に對して幹部としての（戰術的に）教育を實施した。『召されて戰場に立つ兵は神であ

る。人間として最も神に近い存在である』幹部は神主のやうなものだとの、石原聯隊長の兵に對する態度信念のもとに、部隊幹部教育が行はれ、中少尉の中堅青年將校には眞に指導者としての人格、識見、力量を養はしめるべく、國防研究會を起さしめ、國内外の諸情勢と戰略戰術の研究を行はしめ、日常兵と起居を共にする下士官教育は更に一層重視し、人格、識見高邁にして、眞に兵を掌握指導し得る人物を養成せんがため修養會を起さしめて、人格の陶冶と戰術の研究を行はしめた。

この石原聯隊長の行動は凡て「國民戰術教程」であつた。又聯隊もその意味に於て行動してゐた。

私が報知新聞社から石卷市へ特派員として派遣されたのは昭和八年九月であつた。私が石原聯隊長にお目にかゝつたのはこの年の十月末であつたと記憶してゐる。そしてその人格と智謀達識に感激して聯隊の行動に全面的に協力し、翌年九月、石卷市内外の約六十名の青訓生徒、徒弟等の青年と共に國防研究會を起して、石原聯隊長の御指導をいたゞいたのであつた。この青年達は自ら青訓所を開設した者もあり、當時の國研の運動は泪のにぢみ出るやうな忍苦の運動であつた。聯隊並びに鄕土中隊への協力、宿泊訓練　實彈射擊訓練　除隊みやげ廢止運動等、諸種の訓練と運動に協力した。私が軍事學の研究に志したのは實にこの國防研究會創立にはじまるものであつた。こんな事情で私は四聯隊の國研とは密接な連絡の下に往復した。私が「戰爭史大觀」について、石原聯隊長から一貫した講話を聽くことが出來たのは、昭和九年十月、修養會の席で「吾が世界觀」と云ふ題目で下士官に講話された時であつた。これが今日世に「世界最終戰論」と呼ばれてゐるものであるが、この話を聽いた私は生れてはじめての非常な感激を覺えた。今でも私はこの時の感激を忘れようとしても忘れることが出來ない强烈なものであつた。爾來私は性來の癡鈍に鞭打つて戰爭史の研究に志したが、昭和十一年歲暮から十二年一月にかけて、私と某君（現少佐）とが、石原大佐夫妻に伴なはれて（當時參謀本部作戰課長）房州に日蓮聖人の蹟を訪ねて閑を得た旅宿で三日間、したしく戰爭史大觀の講義をうかゞうことが出來た。私の軍事學研究の基礎は凡て石原將軍の戰爭史大觀に基づくものである。曾て昭和十年、四聯隊の革新的行動を世に出すべく原稿をしたゝめたことがあつたが、遂に出版の機會を失つてゐた。石原中將が京都師團長として在任中の、師團に於ける新戰術教育は現代戰に卽應して更に進步的に實行された筈である。昭和十六年五月石原將軍から『最早國民各自が戰術を會得して戰はねばならぬ時が來てゐる。

それ故「國民戰術教程」を書かぬか』とのお話があつたので、爾來私はこれを同好の士にはかり、その人達との研究を私が纏めたものがこの戰術學要綱であるが、取りあへず世に出すことにした。

昭和十八年七月二十三日

國防研究會
編者代表　高木清壽

亂丁落丁等不完全な品がありました節は直接御申込下さい。何時でも取替へます。

昭和十八年十二月廿五日初版印刷
昭和十八年十二月三十日初版發行（六〇〇〇部）

戰術學要綱
㊟定價　三圓五十錢
特別行爲稅相當額　十五錢
合計　三圓六十五錢

認證
承
會
版
出イ 3 0 2 8 0

編輯代表者　高木清壽（たかぎ せいじゅ）
發行者　東京都神田區神保町一ノ二二　藤岡淳吉
印刷者　東京都牛込區山吹町一九八　山本禎男
發行所　東京都神田區神保町一ノ二二　株式會社　聖紀書房
出版會員番號　一一四五三四
電話　神田（23）二〇六八番
振替口座東京一二五八八番

配給元　東京都神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

（78頁）
所本　活版印刷　文祥堂　宗小・本　印刷
製

977
92